

鳥取県米子市

お だか じょう あと
尾 高 城 跡 III

— 山下地区の調査 —

2019

一般財団法人 米子市文化財団

鳥取県米子市

お だか じょう あと
尾 高 城 跡 III

— 山下地区の調査 —

2019

一般財団法人 米子市文化財団

序

当財団では、平成29年度に鳥取県の委託を受け、県道淀江岸本線の歩道設置工事に伴い尾高城跡山下地区の発掘調査を実施しました。

調査の結果、城の大手の登城路とこれを防御する土塁を確認しました。これらは尾高城跡の構造やこの地域の歴史を解明するうえで貴重な資料となると思われます。

この度、この調査成果をまとめ、発掘調査報告書として刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました鳥取県西部総合事務所米子県土整備局ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成31(2019)年3月

一般財団法人 米子市文化財団
理事長 杉原弘一郎

例 言

1. 本報告書は、県道淀江岸本線道路改良工事に伴い実施した尾高城跡山下地区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鳥取県の委託を受けて一般財団法人 米子市文化財団が実施した。
3. 本報告書における方位は公共座標北を示し、X、Yの数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「米子」及び米子市作成の1/2,500「米子市都市計画図」を加筆して使用した。
5. 本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
6. 本報告書で使用した遺構写真は高橋が、遺物写真は佐伯が撮影した。
7. 本報告書の執筆と編集は、高橋が行った。
8. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構の略称は「ODK山下」とした。
2. 本報告書で用いた土塁の番号は、昭和53年度調査のものと整合性を持たせるため、これに統一した。
3. 本報告書における遺物の縮尺は、原則1/3とし、大型品については1/4とした。
4. 本文中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
5. 遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	3
第4節 調査体制	3

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3節 尾高城跡山下地区の既往の調査	9

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法	12
第2節 遺跡の立地と調査区の層序	13
1. 遺跡の立地	13
2. 調査区の層序	13
(1) 調査区南東側	13
(2) 調査区中央	13
(3) 調査区北西側	15
第3節 検出した遺構と遺物	15
1. 土 壘	15
2. 通 路	20
3. 自然流路	20
第4節 遺構外出土遺物	20
1. 平場の造成土（Ⅲ層）出土遺物	20
2. その他の遺構外出土遺物	20

第4章 総 括

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	2
第2図	遺跡位置図	4
第3図	周辺遺跡分布図	8
第4図	尾高城跡山下地区調査位置図	9
第5図	昭和53年度発掘調査平面図	10
第6図	調査グリッド設定図	12
第7図	土層図	14
第8図	遺構分布図	16
第9図	土塁Ⅰ	17
第10図	土塁Ⅰ出土遺物	17
第11図	土塁Ⅱ	18
第12図	土塁Ⅱ出土遺物	18
第13図	通路	19
第14図	自然流路	21
第15図	自然流路出土遺物	22
第16図	平場の造成土（Ⅲ層）出土遺物	22
第17図	その他の遺構外出土遺物（1）	22
第18図	その他の遺構外出土遺物（2）	23
第19図	土塁Ⅰ・Ⅱ、通路位置関係図	25

挿 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	7
第2表	土塁Ⅰ出土遺物観察表	26
第3表	土塁Ⅱ出土遺物観察表	26
第4表	自然流路出土遺物観察表	26
第5表	平場の造成土（Ⅲ層）出土遺物観察表	27
第6表	その他の遺構外出土遺物観察表	27

図 版 目 次

- 図版 1 調査前（南から）
調査前（南西から）
- 図版 2 全景（北西から）
調査区南東側平場検出状況（南東から）
- 図版 3 調査区北西側北東壁土層
調査区中央北東壁土層
- 図版 4 調査区南東側北東壁土層
調査区南東側南東壁土層
- 図版 5 土塁 I と通路（南西から）
土塁 I（南西から）
- 図版 6 土塁 I（北東から）
土塁 I 石列及び犬走り（北東から）
- 図版 7 土塁 II（北東から）
土塁 II（南西から）
- 図版 8 通路（南西から）
通路（北東から）
- 図版 9 通路北西側腰石（南東から）
通路南東側腰石（北西から）
- 図版10 自然流路（南西から）
自然流路土層（南西から）
- 図版11 土塁 II 出土遺物
- 図版12 土塁 I・II、自然流路出土遺物
- 図版13 平場の造成土（Ⅲ層）出土遺物
- 図版14 その他の遺構外出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市尾高地内において計画された県道淀江岸本線（尾高工区）歩道設置工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

工事対象地は、市史跡尾高城跡の南西側に隣接しており、昭和53年度に本調査地の北東側に隣接する県道工事に伴って実施された発掘調査では、土塁3基と登城路と考えられる通路が検出されている^(註)。本調査地でもこれらの土塁と通路の存在が予測され、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要性が生じた。そのため、米子市教育委員会が平成28年度に試掘調査を実施したところ、土塁の基底部と考えられる集石が確認された。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所と米子市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、鳥取県西部総合事務所は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、当財団は、平成29年10月3日付で文化財保護法第92条に基づく発掘届を鳥取県教育委員会に提出し、平成29年11月10日付で鳥取県と契約をした。それに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

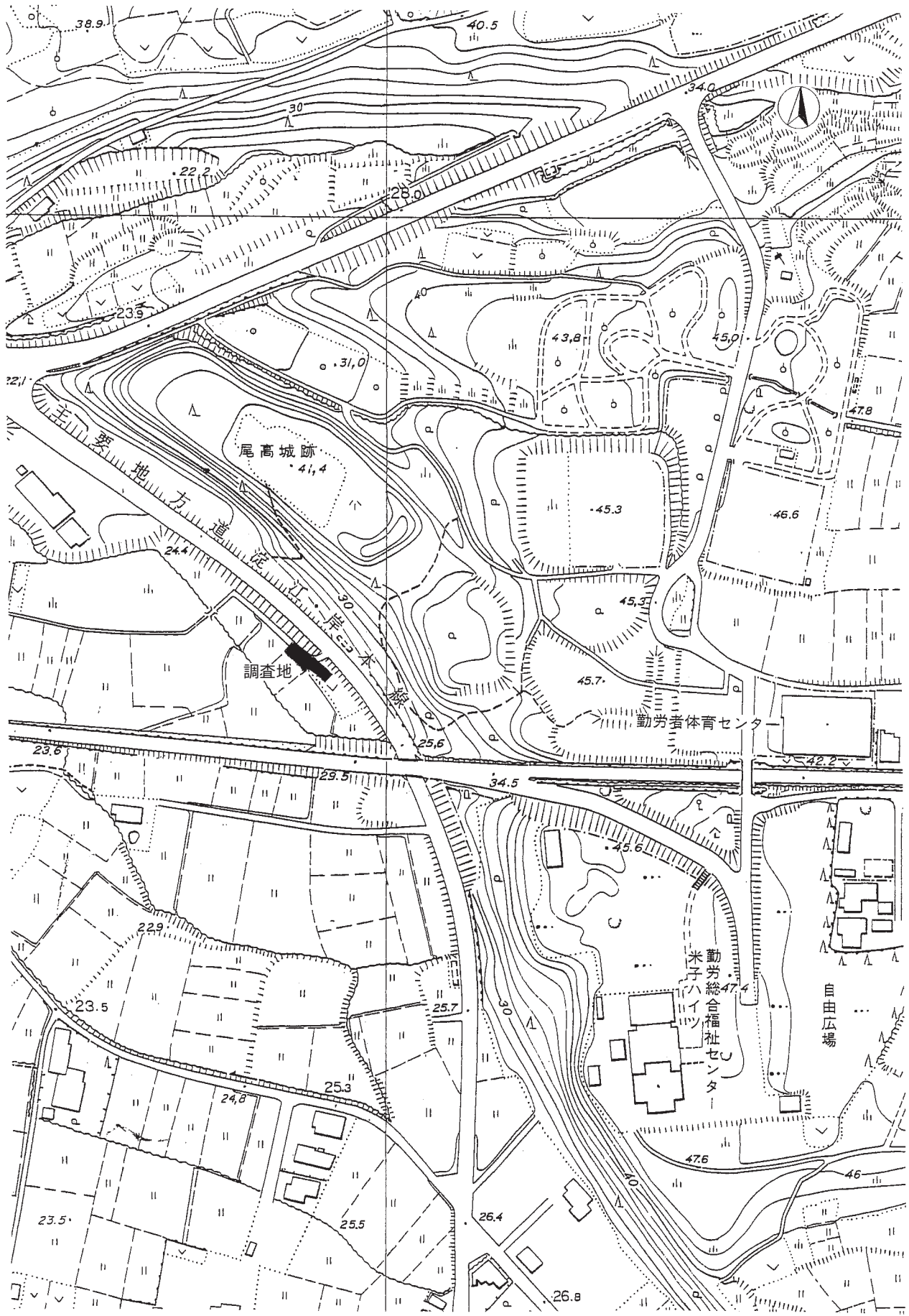
(註) 小原貴樹ほか 1979 『尾高城址Ⅱ - 米子市尾高城址発掘調査報告 -』 尾高城址発掘調査団
米子市教育委員会

第2節 調査の経過

発掘調査は、工事対象地の360㎡を対象とし、平成29年11月13日から平成29年12月14日までの期間で現地調査を行った。

日誌抄

11月13日	発掘器材搬入、草刈り
11月13日～14日	重機による農道のアスファルト撤去及び表土掘削
11月13日～	発掘作業員稼働による包含層の掘削及び遺構検出
11月14日	Cグリッド遺構面検出
11月15日	土塁Ⅱを検出
11月22日	通路を検出
11月28日	A・Bグリッド上層遺構の調査終了
12月4日	下層の自然流路を検出
12月14日	調査終了、発掘器材撤収



第1図 調査地位置図



第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は平成30年度に実施した。出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行った後、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

第4節 調査体制

平成29年度（2017年度）

事業主体 一般財団法人 米子市文化財団
理 事 長 杉原弘一郎
常 務 理 事 先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）
埋蔵文化財調査室
室長兼調査員 小原貴樹
次長兼統括調査員 平木裕子
統括調査員 佐伯純也
非常勤職員 田中昌子
事業担当 主任調査員 高橋浩樹
調査補助員 秦 美香

平成30年度（2018年度）

事業主体 一般財団法人 米子市文化財団
理 事 長 杉原弘一郎
常 務 理 事 先灘達也（一般財団法人米子市文化財団事務局長）
埋蔵文化財調査室
室長兼調査員 小原貴樹
主査兼統括調査員 平木裕子
主幹兼統括調査員 佐伯純也
非常勤職員 田中昌子
事業担当 主任調査員 高橋浩樹
調査補助員 秦 美香

調査協力・管理・指導・助言 米子市教育委員会・鳥取県教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

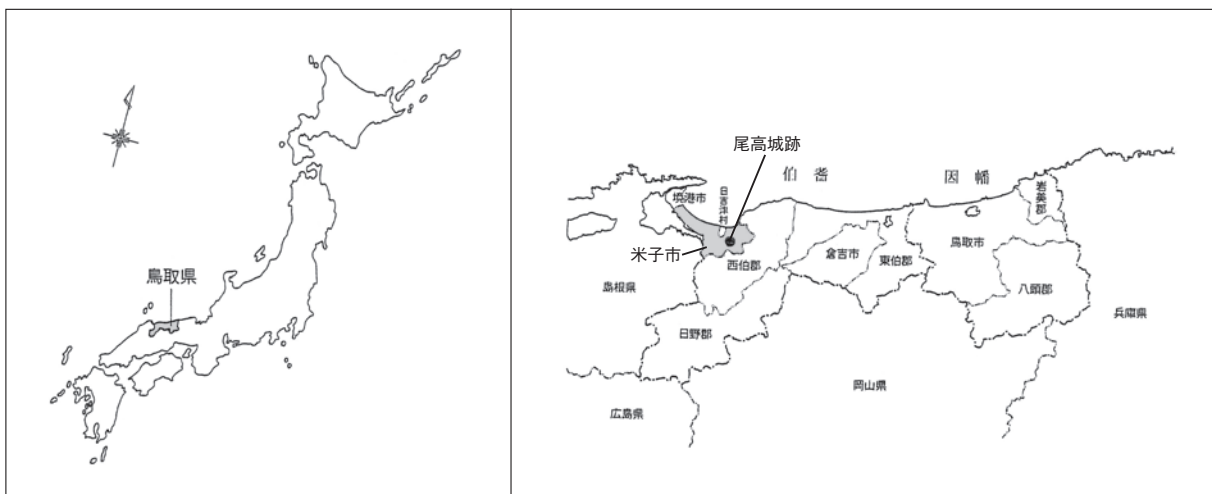
米子市は、鳥取県の最西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には、中国山地に源を発する日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵によって構成されている。また、米子平野の北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は、弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山北西麓にかけて市域が広がり、北は境港市、東は大山町、南東は伯耆町、南は南部町、西は島根県安来市とそれぞれ接している。

尾高城跡は米子市の東部の米子市尾高に所在する。この地は米子市街地の東約7kmにあり、大山山麓の裾が河岸段丘状となる地点にある。ここは、北方の壺瓶山からつづく段丘が精進川によって分断され、小支谷が入り込む地形となっている。尾高城跡は段丘縁辺に築城され、小支谷を巧みに利用して縄張りされている。城跡の東側の段丘上は、岡成原、泉原、百塚原と呼ばれる台地が広がり、水田や畑地として利用されている。西側は平野部との比高差が約20mあり、米子平野を一望でき、遠く島根県境の山並みを見ることができる。北側は平野と段丘沿いの地形となり日本海を望む。

尾高城跡のある段丘下の水田部には、「本池」、「本池山下」、「本池中」という小字があり、伝承によると、この地に大きな池があったとされる。日野川や佐陀川の流路の移動により河跡湖や湿地があって、城の外構えとして用いられたと考えられる。



第2図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代は、米子市内ではブロックを伴うようなまとまった遺跡の検出例はないが、大山西麓では米子市淀江町小波で黒曜石製、泉中峰遺跡(36)で玉髓製のナイフ形石器が発見されている。また、米子平野南部の長者原台地では諏訪西山ノ後遺跡(65)から硅岩製のナイフ形石器がローム層中から出土し、坂長村上遺跡(62)からも黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代には、草創期のものと考えられる尖頭器が大山西麓を中心に広範囲に分布しており、調査地周辺では米子市淀江町中西尾、貝田原遺跡などで発見されている。

早期の遺跡は大山西麓から越敷山周辺にかけて広がりを見せ、上福万遺跡(54)では多量の押型文土器や石器が出土し、土坑や配石墓と考えられる集石遺構が確認されている。また、尾高御建山遺跡(40)、泉中峰遺跡、泉前田遺跡(35)からも少量の押型文土器が出土している。

前期になると海進を迎え、中海沿岸や淀江平野では早期末～前期初頭に集落の形成が始まり、大山西麓から海浜部や潟湖沿岸の低湿地への進出が窺える。渡り上り遺跡(18)、鮎ヶ口遺跡(17)からは多量の土器、石器、木製品が出土しており、特に鮎ヶ口遺跡からは九州の曾畑式に類似する土器などが出土しており、広域的な地域間交流が窺える。

中期には遺跡の数は減少する傾向にあり、現在のところあまり明確ではない。

後期から晩期には大山西麓、中海沿岸、淀江平野の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。河原田遺跡(19)からは磨消縄文土器、沈線文土器、無文土器などが出土し、井手勝遺跡(8)では河川跡から西日本では珍しい朱漆塗りの結菌式櫛や木胎耳栓が出土している。この他に後期の遺跡として調査地周辺では喜多原第4遺跡、岡成第9遺跡(44)があり、後期から晩期にかけては泉中峰遺跡、泉前田遺跡、尾高御建山遺跡で陥穴が確認されている。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期の遺跡には縄文時代晩期から継続するものが多く、中海沿岸の低湿地や扇状地端に拠点的な遺跡が形成され、河川を遡上した小平野をひかえる丘陵上にも遺跡が形成されるようになる。今津岸の上遺跡(1)、尾高御建山遺跡では前期末の断面V字状の環濠が確認されており、稲作文化が導入されたことが窺える。

中期には前期の拠点的な集落が継続して営まれ、農耕技術の向上、人口増加等を背景に遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。角田遺跡(14)では太陽、舟、舟を漕ぐ人、建物2棟、樹木、鹿が描かれた線刻絵画土器が出土しており、当時の精神世界を知るうえで貴重な資料といえる。また、福岡遺跡(7)では土器製作に用いられたと考えられる200基以上の粘土採掘坑が確認され、日下古墳群のある丘陵では中期後葉の木棺墓群、石州府第1遺跡では土器棺墓が造営されている。この他に中期の遺跡として調査地周辺では喜多原第2遺跡(47)、尾高遺跡(41)、百塚第7遺跡(32)、上福万妻神遺跡(53)がある。

中期後葉～後期には前期～中期の拠点的な集落は継続するものは少なく、青木遺跡、福市遺跡、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群のように新たに拠点的な集落が形成される。また、この時期には四隅突出型墳丘墓が発達し、大山西麓では尾高浅山1号墓、日下1号墓が知られている。この他に後期の遺跡として調査地周辺では喜多原第2遺跡(47)、百塚第1遺跡(26)、岡成第9遺跡、新良路遺跡(50)、尾高浅山遺跡(48)などがあり、尾高浅山遺跡では3重の環濠に囲まれた集落が確認され、岡成第9遺跡では木棺墓群が検出されている。

古墳時代

前期の古墳には石州府29号墳(57)、晩田古墳群(3)などがある。石州府29号墳は直径16mの円墳で、割竹形木棺を埋葬施設とし、獣帯鏡が出土している。

集落には上福万遺跡、上福万妻神遺跡、尾高御建山遺跡、尾高遺跡、喜多原第2遺跡、百塚第1遺跡があり、尾高遺跡では方形区画溝を持つ居館遺構が確認され、畿内系の土器が出土していることから畿内との関係を持った豪族が居館を構えていたと考えられている。

中期の古墳には上ノ山古墳(11)向山3号墳(9)、井手挾3号墳(20)坂ノ上1号墳がある。上ノ山古墳は小枝山古墳群(11)内に存在し、2基の竪穴式石室を埋葬施設とし、内行花文鏡、滑石製勾玉、甲冑などが出土している。また、中西尾古墳群(20)内に存在する井手挾3号墳からは円筒埴輪や盾持人埴輪などの形象埴輪が出土している。

集落には百塚第1遺跡、百塚第4遺跡(29)、百塚第5遺跡(30)、百塚第6遺跡(31)がある。

後期には群集墳がつくられるようになり、大山西麓には南から石州府古墳群(57)、日下古墳群(52)、石田古墳群(49)、岡成古墳群(43)、尾高古墳群(39)、百塚古墳群、中間古墳群(37)、小波上古墳群(24)、壺瓶山古墳群(23)が連なっている。また、淀江平野を取り囲むように西尾原古墳群(21)、中西尾古墳群、高井谷古墳群(16)、稲吉古墳群(15)、城山古墳群(12)、小枝山古墳群、向山古墳群(9)が形成され、向山4号墳、長者ヶ平古墳、岩屋古墳、小枝山12号墳、石馬谷古墳などの大型の前方後円墳が築かれる。向山古墳群は独立丘陵上に立地し、前方後円墳8基と方墳1基からなり、このうち、岩屋古墳は切石積の横穴式石室を持ち、金銅製冠、環頭太刀、三輪玉、銅鈴などが出土している。石馬谷古墳からは本州唯一の石馬が出土したと伝えられている。石州府1号墳は直径40mの西伯耆最大の円墳で、巨大な横穴式石室(全長7.5m)を主体部としている。

集落には石州府第4遺跡(58)、泉中峰遺跡、泉上経前遺跡(34)、大下畑遺跡(25)、福頼遺跡(22)、百塚第1遺跡、百塚第4遺跡、百塚第5遺跡、百塚第7遺跡がある。

飛鳥～平安時代

白鳳時代には仏教文化が盛行し、多くの寺院が建立される、上淀廃寺跡(10)は金堂の東に南北に瓦積基壇が2塔近接して並び、その北側には基壇はないが、心礎があり、3塔が南北に並ぶ類例のない伽藍配置をとる。また、法隆寺金堂壁画と並ぶ国内最古級の彩色壁画片や塑像片が出土している。この他に、この時期の寺院には石製鴟尾を有し、東を正面とする法起寺式伽藍配置をとる大寺廃寺跡(60)と坂中廃寺跡(61)がある。

律令体制下では当地域は伯耆国会見郡と汗入郡に属している。会見郡は壺瓶山を郡境にして米子平野の大部分がこれに属しており、長者原台地上の長者屋敷遺跡(64)や坂長第6遺跡(63)などで企

画的に配置された大型の掘立柱建物群が検出されており、会見郡衙の施設である可能性が高い。一方、汗入郡衙は現在のところ確認されておらず、淀江平野は汗入郡新井郷に属していたと推定されている。

この時期には生産遺跡も確認されており、上淀廃寺跡の北側に所在する礎利遺跡（5）は鍛冶遺跡であるとされているが、布目瓦、鴟尾瓦、彩釉陶器、石帯などが出土しており、同寺との関連が窺える。また、小枝山瓦窯跡（13）は上淀廃寺跡の南約1kmにあり、同寺の瓦を焼いた窯である。

集落には上福万遺跡と石州府第4遺跡があり、上福万遺跡からは「奈」と書かれた墨書土器、石州府第4遺跡からは土馬やミニチュア土製品が出土しており、官衙的な性格が窺える。

中 世

中世には、尾高城跡南大首で鎌倉時代の建物跡が発見されており、有力な土豪の存在が推察される。その後、室町時代には伯耆の国人層の行松氏が尾高城に番居したと伝えられるが、大永4（1524）年の尼子氏による伯耆侵入を受け、行松氏は因幡へ逃れたと伝えられる。尼子氏と毛利氏の覇権争いが激しくなった永祿年間には、杉原盛重らにより西伯耆の戦略的な拠点の城として尾高城が整備され、その城下町として尾高の町も形成されたと考えられる。なお、周辺には河岡城（56）、小波城などが築かれている。

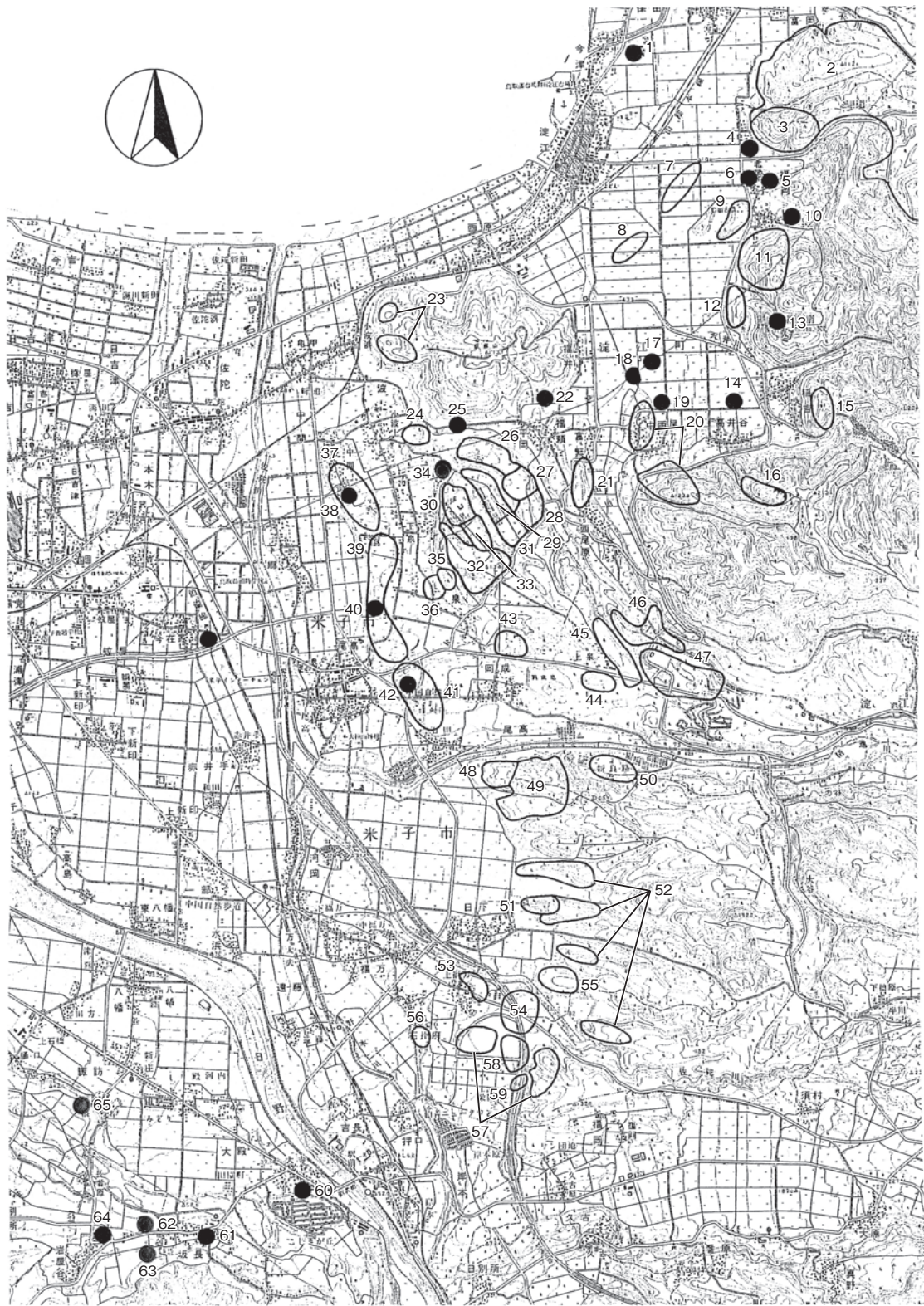
近世・近代

近世には、慶長5（1600）年に伯耆18万石の領主として中村氏が尾高城に一時的に入城し、一年後に米子城の完成を得て米子城へ移り、尾高城は廃城となっている。また、これに伴い尾高城下の家臣団や町人も米子城下へ移住させられ、残された集落は在郷町として周辺農村の物資流通の中心として残り、その後は大山参りや大山の牛馬市の宿泊地となり、交通の要所として発展した。

近代には、伯仙地域の商工業の中核の町として発展した。昭和32（1957）年には西伯郡伯仙町となり、昭和43（1968）年には米子市と合併し、現在に至っている。

1 今津岸の上遺跡	2 妻木晩田遺跡	3 晩田古墳群	4 晩田遺跡	5 礎利遺跡
6 北尾宮廻遺跡	7 福岡遺跡	8 井手勝遺跡	9 向山古墳群	10 上淀廃寺跡
11 小枝山古墳群	12 城山古墳群	13 小枝山瓦窯跡	14 角田遺跡	15 稲吉古墳群
16 高井谷古墳群	17 鮎ヶ口遺跡	18 渡り上り遺跡	19 河原田遺跡	20 中西尾古墳群
21 西尾原古墳群	22 福頼遺跡	23 壺瓶山古墳群	24 小波上古墳群	25 大下畑遺跡
26 百塚第1遺跡	27 百塚第2遺跡	28 百塚第3遺跡	29 百塚第4遺跡	30 百塚第5遺跡
31 百塚第6遺跡	32 百塚第7遺跡	33 百塚第8遺跡	34 泉上経前遺跡	35 泉前田遺跡
36 泉中峰遺跡	37 中間古墳群	38 坂ノ上遺跡	39 尾高古墳群	40 尾高御建山遺跡
41 尾高遺跡	42 尾高城跡	43 岡成古墳群	44 岡成第9遺跡	45 喜多原第3遺跡
46 喜多原第1遺跡	47 喜多原第2遺跡	48 尾高浅山遺跡	49 石田古墳群	50 新良路遺跡
51 日下堂平遺跡	52 日下古墳群	53 上福万妻神遺跡	54 上福万遺跡	55 日下寺山遺跡
56 河岡城跡	57 石州府古墳群	58 石州府第4遺跡	59 石州府第2遺跡	60 大寺廃寺跡
61 坂中廃寺跡	62 坂長村上遺跡	63 坂長第6遺跡	64 長者屋敷遺跡	65 諏訪西山ノ後遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 周辺遺跡分布図

第3節 尾高城跡山下地区の既往の調査

尾高城跡山下地区では、これまでに昭和53年度に発掘調査、平成27年度と平成28年度に試掘調査が行われている。

昭和53年度の調査は、県道淀江岸本線の建設工事に伴い、尾高城跡の第4次調査として実施された。調査の結果、本丸から中の丸下の小平場では遺構は認められず、中世の遺物の出土はごく僅かで、居住域とは考えられない状況であったが、造成された平場であることが確認されている。

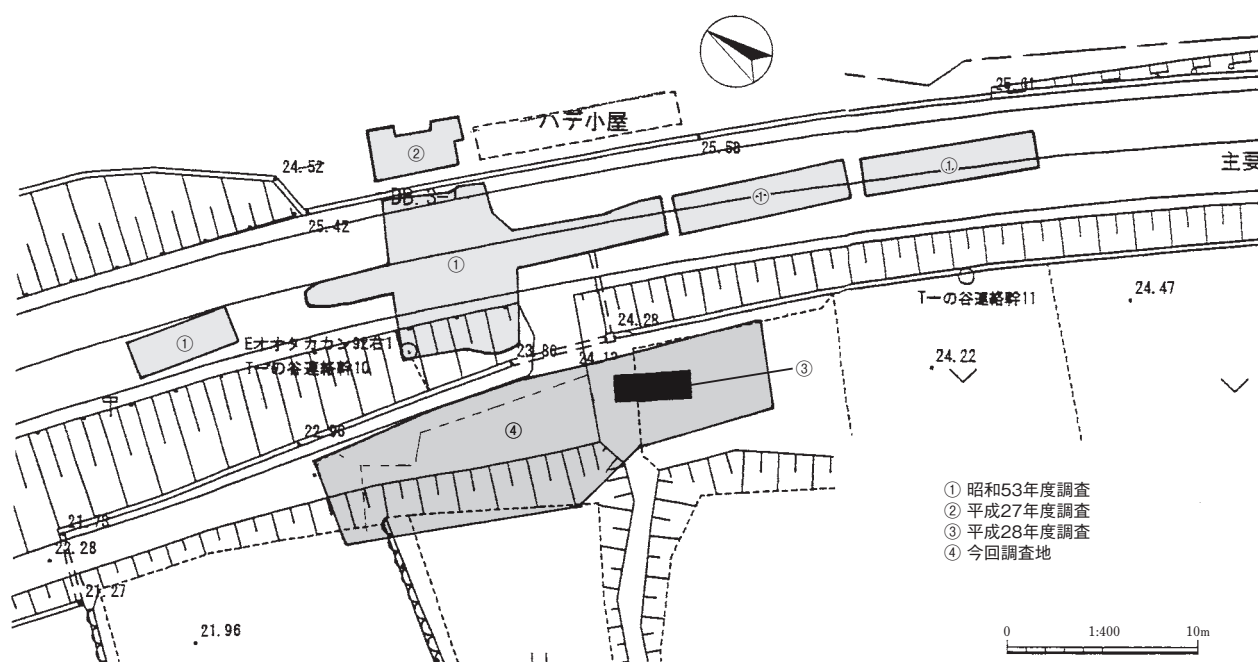
また、本丸と中の丸との間の堀切(堀Ⅰ)からのびる土塁で防御された通路が検出された(第5図)。このうち、土塁Ⅰ・Ⅲは、大型の自然礫を面をそろえて2段に積んだ基底部をもち、土塁Ⅰは、拳大の礫を含む土で土塁を積み上げている。土塁Ⅰと土塁Ⅲに挟まれた通路の幅は3.0~3.3mを測り、北東から南西へ緩やかに下降傾斜している。その後、土塁Ⅲを削平して通路を埋めて、南東側に新たに土塁Ⅱを築いて通路を拡張している。これらの帰属時期は、出土遺物から16世紀代以降と考えられている。

平成27年度は、県道の北東側に歩道設置工事が計画され、土塁の高まりが遺存していることと、位置的にも昭和53年度の調査で確認された土塁と通路の存在が想定されたため試掘調査が実施された。

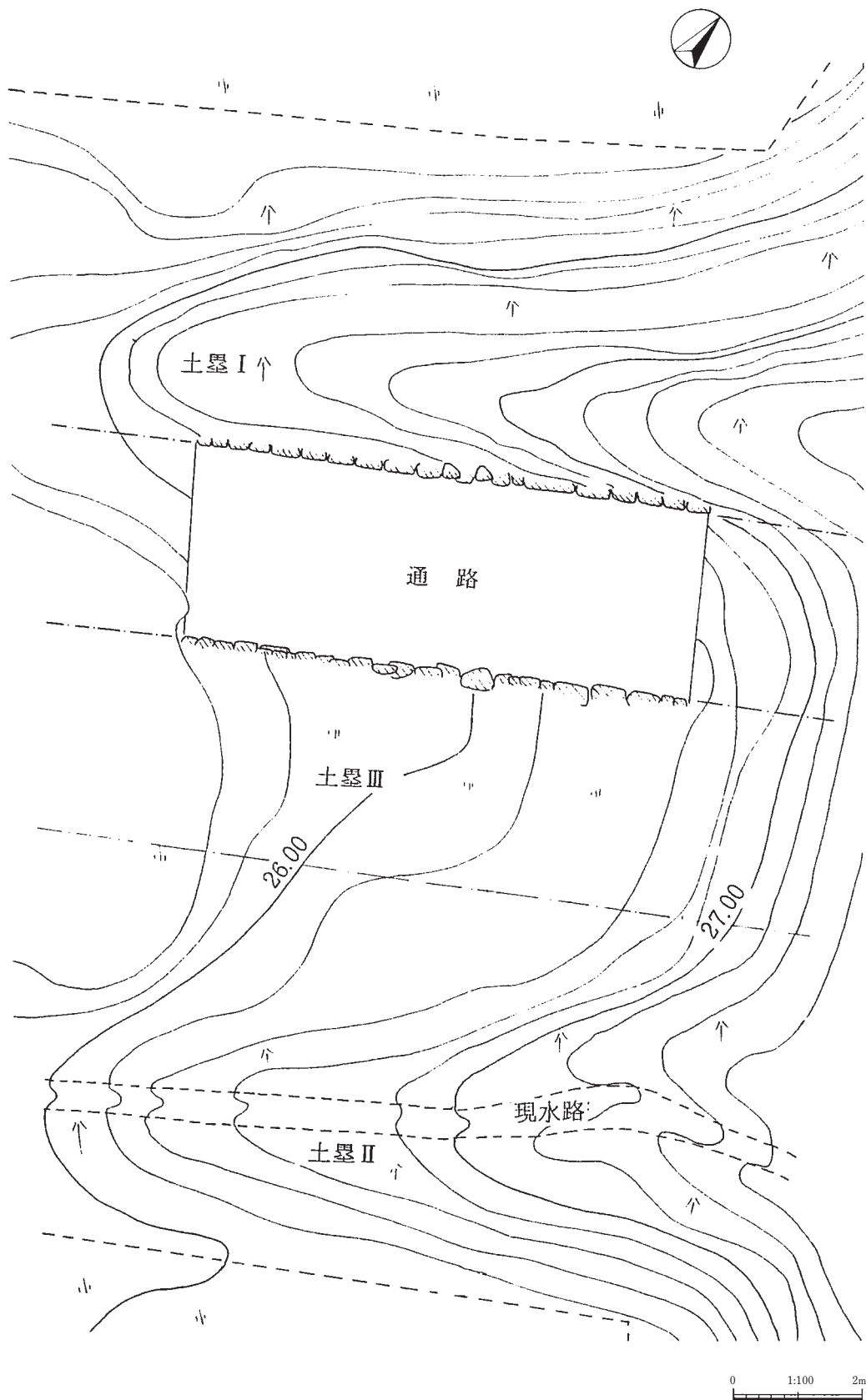
調査の結果、土塁Ⅰの一部を確認した。南西側は道路工事によると考えられる改変を受け、北西側は調査区外へ広がるが、長さ1.3mを検出し、幅は現状で0.7~0.9mを測る。基底部には2つの腰石が内側に面を揃えて据えられていた。通路には部分的に硬化面が認められた。この調査の結果を受けて歩道設置の事業計画が見直されることとなった。

平成28年度は、平成27年度の試掘調査の結果を受けて、県道の南西側に歩道の設置が計画され、試掘調査が実施された。

土塁Ⅰ・Ⅲと通路部分は、アスファルト舗装された農道となっていたため、調査は実施できなかったが、農道の南東側の畑地で土塁Ⅱの基底部を検出した。



第4図 尾高城跡山下地区調査位置図



第5図 昭和53年度発掘調査平面図

尾高城略史年表

時代	西暦	年号	月日	出来事
鎌倉	1280	弘安年間		南大首堀外の建物（建物跡Ⅰ・Ⅱ）建つ 在地領主の住居か
室町	1337 1470	建武4 文明2		山名時氏、伯耆の守護職となる 尼子清定、伯耆へ侵入、山名方、南條名和氏らと戦（出雲私史）
戦 国 時 代	1515	永正12	2	外構城の山名幸松弥次郎、大曾祢氏を討伐（宇田川神社棟札）
	1518	永正15		尼子経久、尾高の行松氏、羽衣石南條氏を攻撃（出雲私史）
	1524	大永4	4・5	大永の五月崩れ、尼子経久伯耆侵入、尾高行松正盛流浪 尼子方吉田光倫在番（伯耆民諺記）
	1543	天文12	8・6	尼子晴久、瑞仙寺領安堵（瑞仙寺文書）
	1557	弘治3		杉原盛重、神辺城主となる
	1562	永禄5		行松正盛、毛利氏の武威により尾高城回復
	1563	永禄6	5	尼子、河岡城攻め、毛利、杉原らを援軍派遣 行松正盛病死、杉原盛重、尾高城入城 弓ヶ浜合戦
	1564	永禄7		杉原盛重、天満山城攻略
	1565	永禄8	8・6	杉原盛重、江尾城蜂須賀右衛門尉を攻略（芸陽記）
	1566	永禄9	3・22	杉原盛重、伯耆瑞仙寺の寺領を安堵（瑞仙寺文書）
	1567	永禄10	10・26	杉原盛重、田中若干代に比江津神主職を預け置く（蚊屋島神社文書）
	1568	永禄11	7	毛利の九州大友出兵 杉原以下伯耆の武士も従軍
	1569	永禄12	6	尼子回復戦、山中幸盛ら隠岐から松江末次城へ（陰徳太平記） 大山寺教悟院ら味方し尾高城陥落 布部の合戦
		1570	元亀1	
	1571	元亀2	6	山中鹿之助を末石城で捕虜とする
安 土 桃 山	1573	天正1	5・3	杉原盛重 光源院に足利義輝の焼香料として、伯耆興恩寺を寄進（光源院文書）
	1575	天正3		中書家久公御上京日記に「緒高といへる城有」の記述
	1578	天正6	7	尼子勝久、播磨上月城で敗死、山中幸盛も殺される
	1581	天正9	10・12 12・25	杉原盛重、伯耆久古庄を大山寺西明院に寄進（大山寺文書） 杉原盛重、八橋城にて卒す（伯耆民談記）
	1582	天正10	8・16	佐陀の杉原影盛、尾高の兄元盛を誅殺。毛利輝元これを撃たせ、影盛を平田にて斬る（陰徳太平記） 吉田元重、尾高城に在番
	1585 1591	天正13 天正19	7	豊臣側の東伯耆の南條元統が香原山城を攻め落とす 吉川広家、東出雲、西伯耆、隠岐の領主となる
江戸	1600 1601	慶長5 慶長6	9	中村一忠、静岡から転封。尾高城に入城 しばらくして、米子城へ移る。尾高城廃城

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法

調査は、まず、重機により北西側の農道のアスファルトと農道の路盤、南東側の表土を除去した後、人力により包含層の掘削及び遺構の検出を実施した。

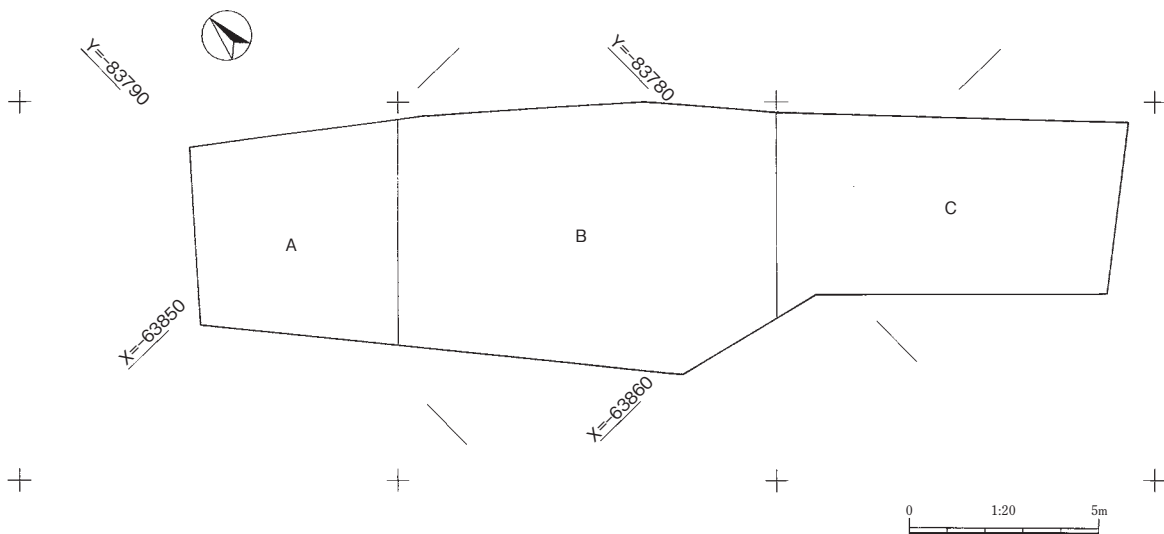
調査にあたっては、排土置き場を北西側の調査区外に設けたため、排土の運搬の利便性を考慮して、調査区の南東側から北西側へと順に行った。

調査グリッドの設定は、調査区が狭小であるため、調査区に沿うように任意で10m画で設定し、グリッド名は、北西から南東へA～Cとした（第6図）。包含層及び築城に関わる造成土から出土した遺物は、このグリッドに基づいて層位毎に一括して取り上げた。

調査区の南東側は、築城に関わると考えられる造成土上面までの調査が終了した後、造成土の堆積状況及びさらに下層の遺構の有無を確認するために、北東側と南東側の壁際にサブトレンチを設定して調査を実施した。その結果、16世紀代の遺物が出土し、調査区の南側では造成土直下に自然堆積層を確認したが、下層の遺構は認められなかった。さらに、調査の最終段階には造成土の帰属時期をさらに明らかにするために、北東側に長さ5.8m、幅2mのトレンチを設定して遺物の検出に努めた。

一方、調査区の中央から北西側にかけては、北東側の隣接地（現県道）での調査で、土塁と緩やかに下降傾斜する通路が検出されており、本調査地でも同じような状況で土塁と通路が検出されるものと想定された。そこで北東側の壁際にサブトレンチを設定し、土層を観察しながら掘り下げを行った。その結果、土塁Iと通路を検出し、さらに下層に土石流による自然流路を確認したため、土塁Iと通路の調査が終了した後、自然流路が存在する範囲をさらに掘り下げて調査を実施した。

検出した遺構の記録には、トータルステーションとオートレベルを用いて座標値を記録した。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、白黒とリバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。



第6図 調査グリッド設定図

第2節 遺跡の立地と調査区の層序

1. 遺跡の立地

尾高城跡は、米子平野の東部に位置し、大山山麓からなだらかに広がる台地の縁辺部にあり、本調査地は、その台地の裾部に立地する。この台地の裾部に沿うように県道が通っており、県道の南西側は畑地と水田となっている。調査地の現況は南東側は畑地となっているが、調査地の中央から北西側にかけては南東から北西へ下降傾斜するアスファルト舗装された農道となっており、調査地の南西側はさらに一段下がった水田となっている。

2. 調査区の層序

(1) 調査区南東側

調査区の南東側は、平場の造成が行われており、現地表面から現耕作土（Ⅰ層）、旧耕作土（Ⅱ層）、平場の造成土（Ⅲ層）、自然堆積層（Ⅳ層）となっている。

Ⅰ層：Ⅰ層（1層）は現耕作土で、層厚は15～50cmを測る。

Ⅱ層：Ⅱ層（3層）は旧耕作土で、層厚は10～40cmを測る。

Ⅲ層：Ⅲ層は平場の造成土で、その上面は硬く締まっており、部分的に淡黄褐色のタタキ面を確認した。Ⅲ層上面で遺構検出を試みたが、遺構は確認できなかった。Ⅲ層は北東壁では6層(33～38層)、南東壁では9層(41～45、34、36～38層)の造成土を確認しており、東から西へ下降傾斜するように順次埋め立てて造成している。北東側では下層まで掘り下げていないため、造成土の厚さを明らかにすることはできなかったが、現状で75cmを測る。なお、南東側での造成土の厚さは中央付近で45cm、南西端で20cmを測り、南西へいくにしたがって造成土の厚さは薄くなる。出土遺物から16世紀代の造成と考えられる。

Ⅳ層：Ⅳ層(46層)は平場の造成土直下に水平堆積する自然堆積層で、調査区の南側で確認された。淡灰褐色を呈する砂質土で、礫や黄褐色粒は含まれず、締まりがない。遺物は認められなかった。

(2) 調査区中央

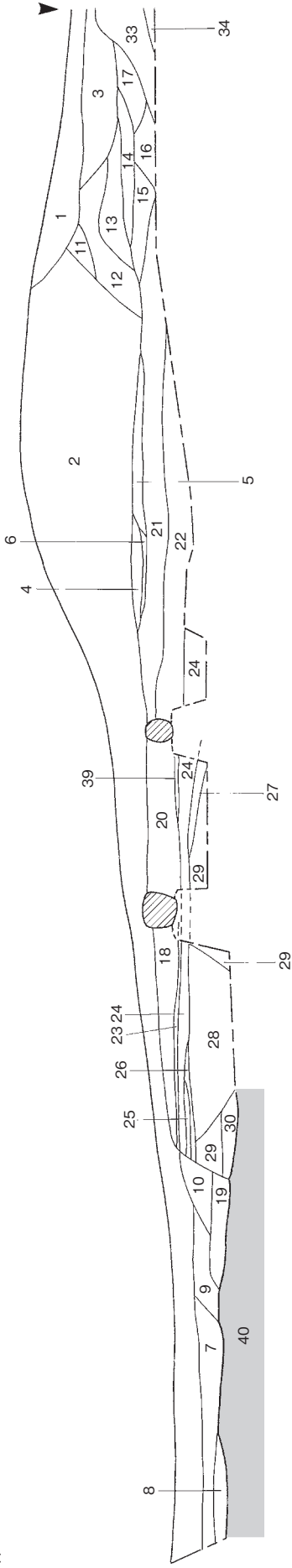
調査区の中央付近は、農道の工事により削平を受けており、南東側で農道の造成工事以前の水田耕作土（A層）が僅かに残存し、それ以下は小礫を多量に含む淡褐色土（B層）、中～大礫の自然堆積層（C層）となっており、調査区南東側のような造成土は認められない。

A層：A層（4～6層）は、農道の造成工事以前の水田耕作土で、調査区中央やや南東寄りに僅かに残存する。

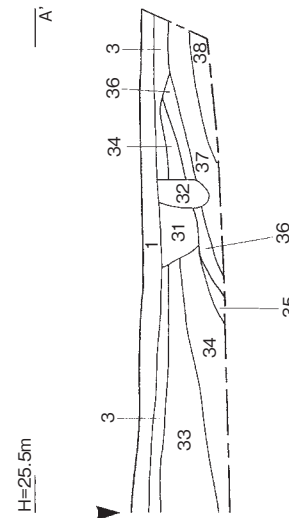
B層：B層(21層)は、淡褐色を呈し、小礫を多量に含む。土石流状の堆積の様相を呈し、層厚は10～30cmを測る。B層上面で通路を検出し、本層中からは僅かであるが、陶磁器、土師質土器が出土した。

C層：C層(22層)は、中～大礫の自然堆積層で、層厚は40cmを測る。遺物は認められなかった。

H=25.5m
A

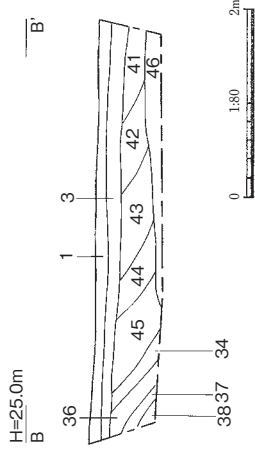


H=25.5m
A

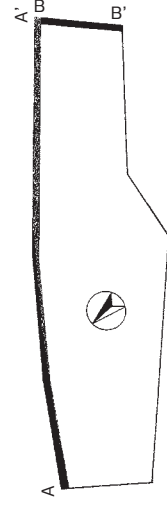


- 1 暗褐色土(II層、耕作土)
- 2 農道成土、路盤土
- 3 灰褐色土(II層、旧耕作土)
- 4 暗灰色土(A層、旧耕作土)
- 5 淡褐色土(A層、旧耕作土)
- 6 淡茶灰色土(A層、旧耕作土)
- 7 灰褐色土(旧耕作土)
- 8 淡褐色土(小礫混じり)
- 9 淡褐色土(小~中礫混じり)
- 10 淡灰褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 11 褐色土(土層II)
- 12 褐色土(土層I、小~中礫混じり)
- 13 淡褐色土(土層II)
- 14 淡褐色土(黄褐色粒混じり)
- 15 淡灰褐色土(黄褐色粒混じり)
- 16 灰褐色土
- 17 褐色土
- 18 淡褐色砂質土(土層I、小~中礫混じり)
- 19 灰褐色土(黄褐色粒、中礫混じり)
- 20 淡褐色土(通路埋土、小~中礫混じり)
- 21 淡褐色土(B層、小礫が多量に混じる)
- 22 中~大礫層(C層)
- 23 灰褐色土
- 24 淡褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 25 淡黄灰色微細粒砂
- 26 灰褐色土
- 27 灰褐色土
- 28 褐色土(自然流路埋土、小~中礫が多量に混じる)
- 29 灰褐色土
- 30 灰褐色土
- 31 暗灰色土
- 32 褐色土
- 33 灰褐色土(III-1層、硬く締まる、黄褐色小ブロックが多量に混じる)
- 34 黒色土(III-7層、黄褐色粒混じり)
- 35 淡褐色土(黄褐色粒混じり)
- 36 褐色土(III-8層、黄褐色粒混じり)
- 37 暗灰色土(III-9層、黄褐色粒混じり)
- 38 灰褐色砂質土(III-10層)
- 39 炭化物層
- 40 淡黄褐色土(地山、小~中礫混じり)

H=25.0m
B



- 1 暗褐色土(II層、耕作土)
- 3 灰褐色土(II層、旧耕作土)
- 41 褐色土(III-2層)
- 42 褐色土(III-3層、黄褐色粒混じり)
- 43 灰褐色土(III-4層、黄褐色粒・黄褐色ブロック混じり)
- 44 灰褐色土(III-5層、黄褐色ブロック、炭化物混じり)
- 45 淡褐色土(III-6層、黄褐色粒混じり)
- 34 黒色土(III-7層、黄褐色粒混じり)
- 36 褐色土(III-8層、黄褐色粒混じり)
- 37 暗灰色土(III-9層、黄褐色粒混じり)
- 38 灰褐色砂質土(III-10層)
- 46 淡灰褐色砂質土(IV層)



附7図 土層図

(3) 調査区北西側

調査区の北西側は、農道の工事により削平を受けており、農道の造成土直下で遺構（土塁Ⅰ）を検出した。土塁Ⅰの盛土直下は、水成堆積の細粒砂（23、27層）や微細粒砂（25、26、29層）が卓越し、土石流による自然流路（28層）も確認された。北西端は、1段下がった耕作地となっており、現地表面から農道の造成土（2層）、耕作土（7、8層）、小～中礫を含む淡黄褐色土（地山、40層）となっている。

第3節 検出した遺構と遺物

1. 土 塁

土塁Ⅰ（第9・10図）

土塁Ⅰは、調査区の北西側に位置し、通路の北西側に隣接する。農道工事によって上部が削平されているが、北東－南西方向にのびる。北東側は調査区外へのび、南西側は水田の段切りによって削平されているが、長さ4.5m、基底部幅3.1m、高さ0.2～0.3mを測る。北西側の基底部には30～90cm大の石を据え付け、土塁の盛土は農道工事によって上部が削平されているため、小～中礫を含む淡褐色砂質土を厚さ0.1～0.3m確認したのみである。

また、北西側は0.3m程、自然地形を掘りこみ、北東側では礫混じりの土、南西側では黄褐色粘土を主体に盛土を行って犬走りを設けている。犬走りの幅は0.6～0.8mを測る。なお、土塁Ⅰは南西側の現水田の畦畔に続いており、土塁はさらに南西へのびると考えられる。

本遺構からは土師質土器が出土した。このうち、2点を図示する。1、2は土師質土器の皿で、いずれも手づくね成型を行っている。1は口縁部の下に段を有し、口唇をつまみ上げている。2は口縁部が外傾し、端部は丸くおさめる。

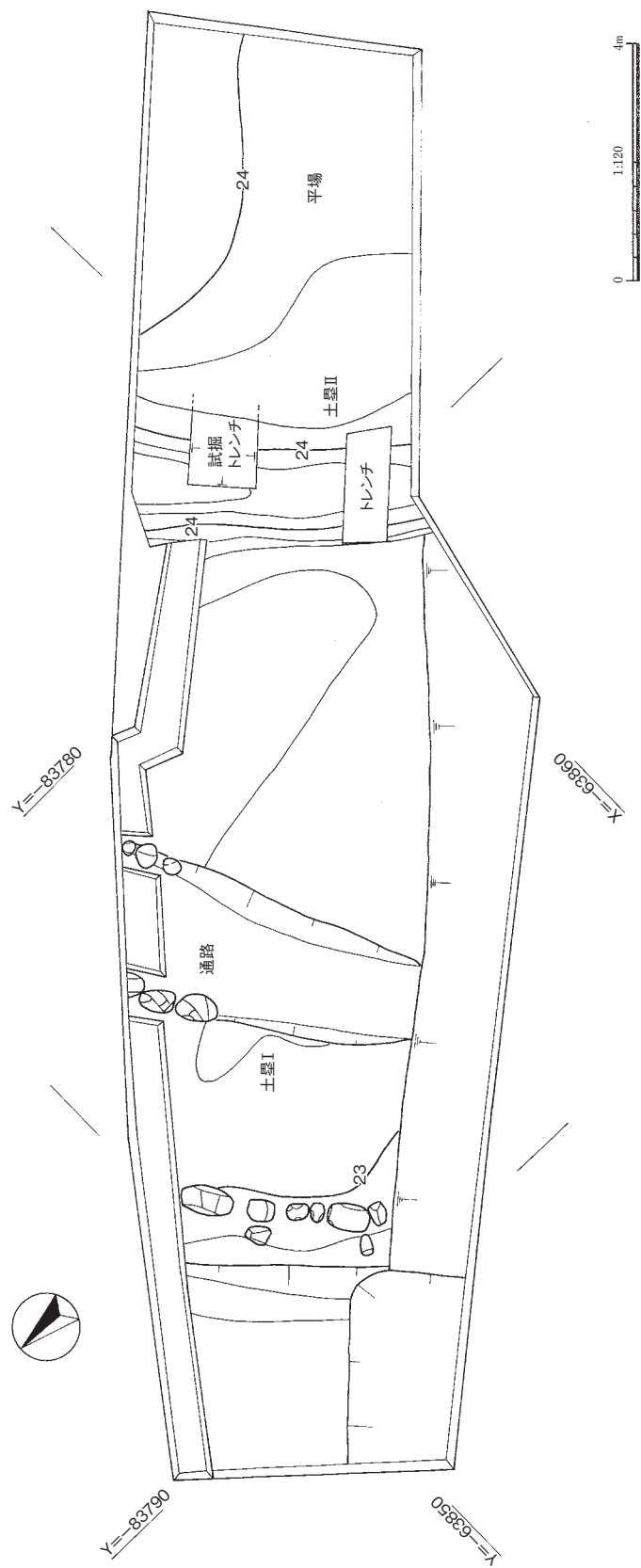
本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀代と考えられる。

土塁Ⅱ（第11・12図）

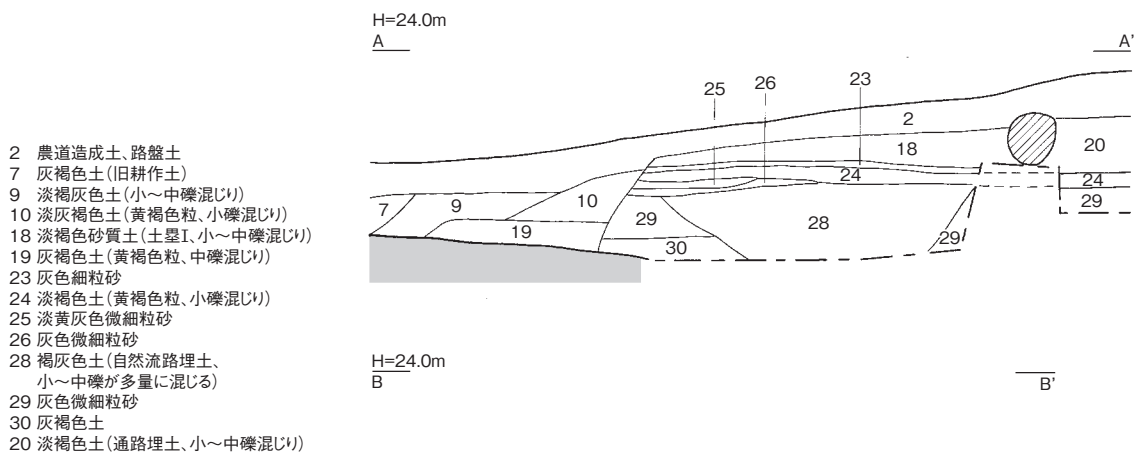
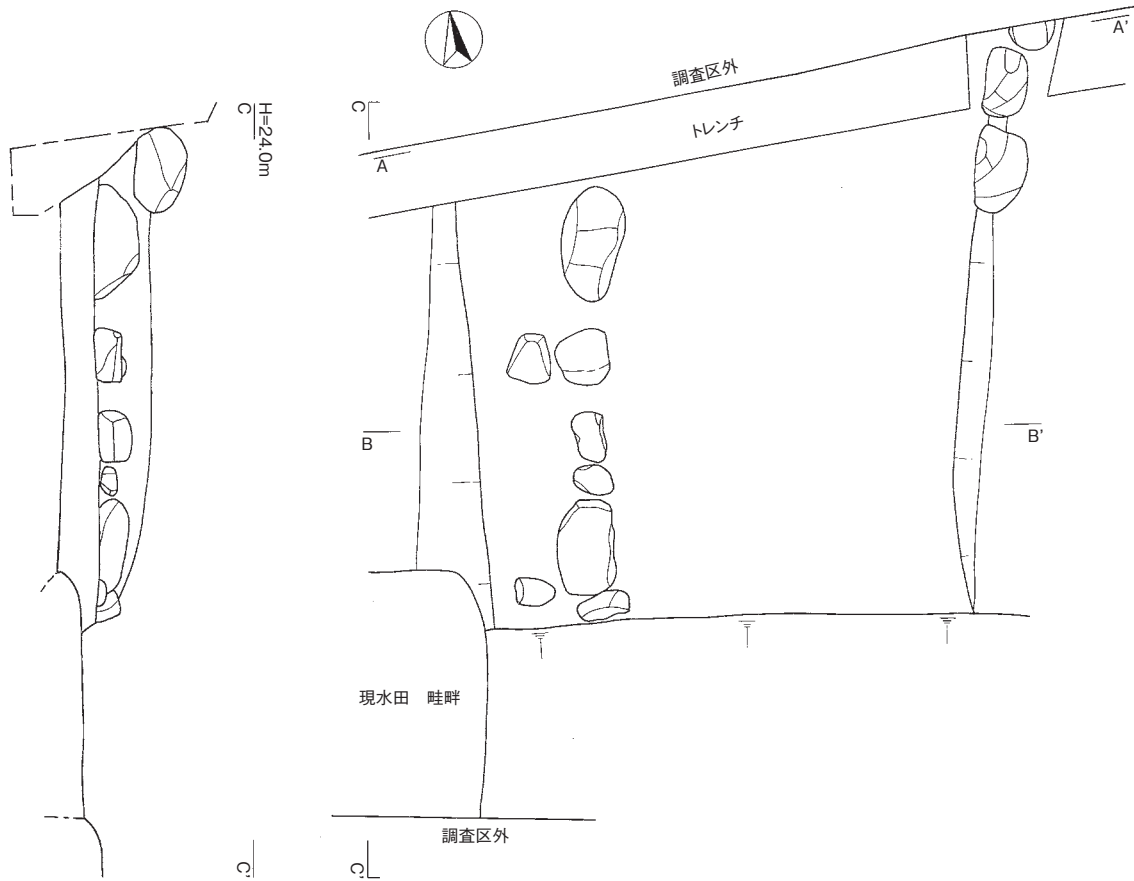
土塁Ⅱは、調査区の中央やや南東寄りで見出した。畑地の耕作と農道の造成により改変を受けているが、北東－南西方向にのびる。北東側と南西側は調査区外へのびているが、現状で長さ4.9m、基底部幅1.8～2.0m、高さ0.5～0.6mを測る。なお、南西側の現水田の畦畔に続いており、土塁はさらに南西へのびると考えられる。北東側では下層に淡褐灰色土、上層に小～中礫を含む褐色土、南西側では下層に中～大礫を含む灰褐色土、上層に暗褐色土を盛土して構築している。

本遺構からは陶磁器、土師質土器が出土した。このうち、8点を図示する。1は上田分類B4類の青磁碗で、外面には線描きによる蓮弁文が施文されている。2は青花で、型作りの兜鉢である。3、4は磁器で、3は伊万里焼の碗、4は伊万里焼の皿で、見込みには蛇の目釉剥ぎが施されている。5、6は陶器である。5は唐津焼の皿で、見込みには砂目がある。6は備前焼の徳利の口縁部である。7、8は土師質土器の皿で、いずれも手づくね成型を行っている。7は口縁部が内湾し、口唇を僅かにつまみ上げている。8は口縁部が僅かに外反する。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀後半～17世紀と考えられる。



第8図 遺構分布図

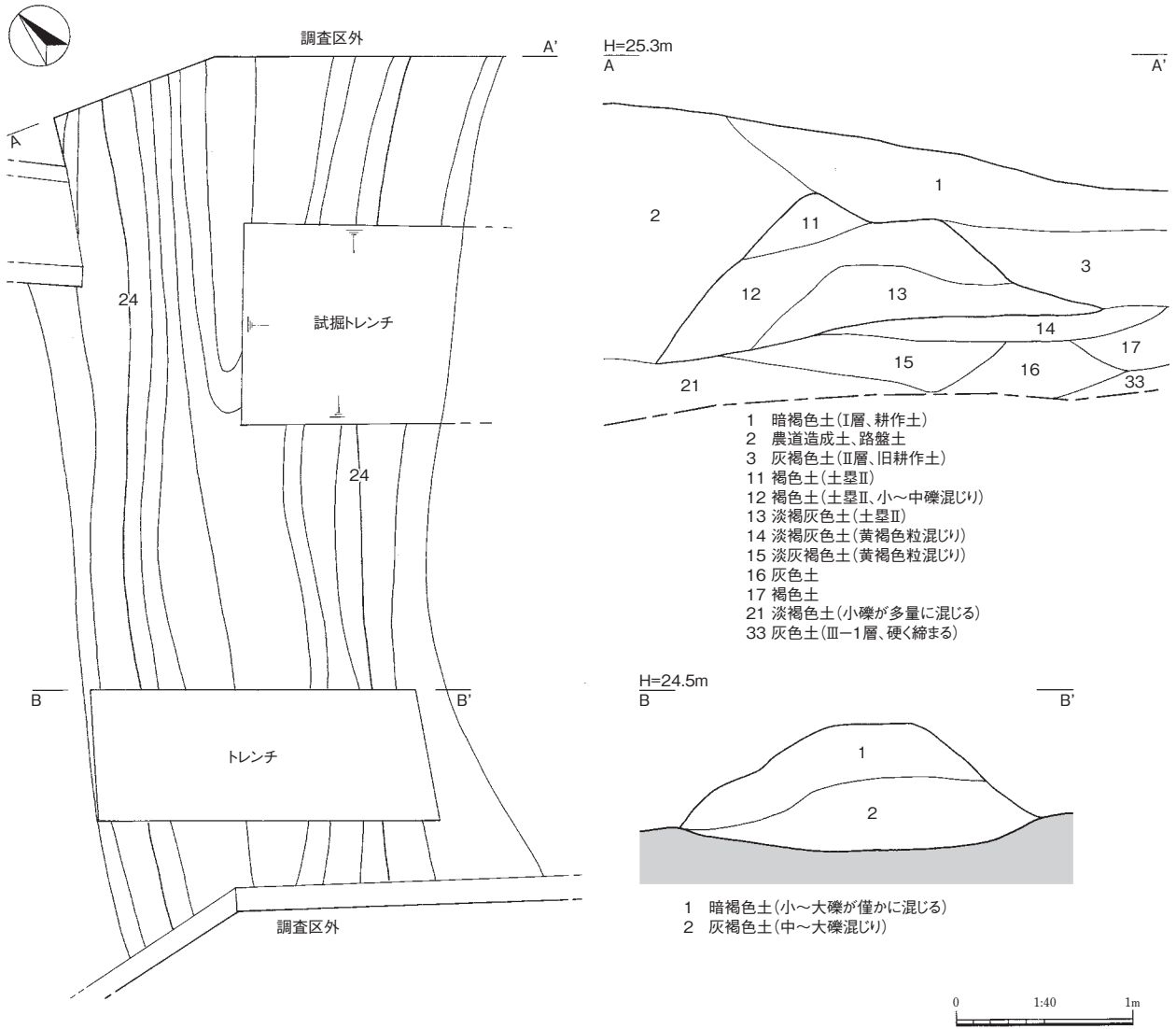


- 2 農道造成土、路盤土
- 7 灰褐色土(旧耕作土)
- 9 淡褐灰色土(小～中礫混じり)
- 10 淡灰褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 18 淡褐色砂質土(土層I、小～中礫混じり)
- 19 灰褐色土(黄褐色粒、中礫混じり)
- 23 灰色細粒砂
- 24 淡褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 25 淡黄灰色微細粒砂
- 26 灰色微細粒砂
- 28 褐灰色土(自然流路埋土、小～中礫が多量に混じる)
- 29 灰色微細粒砂
- 30 灰褐色土
- 20 淡褐色土(通路埋土、小～中礫混じり)

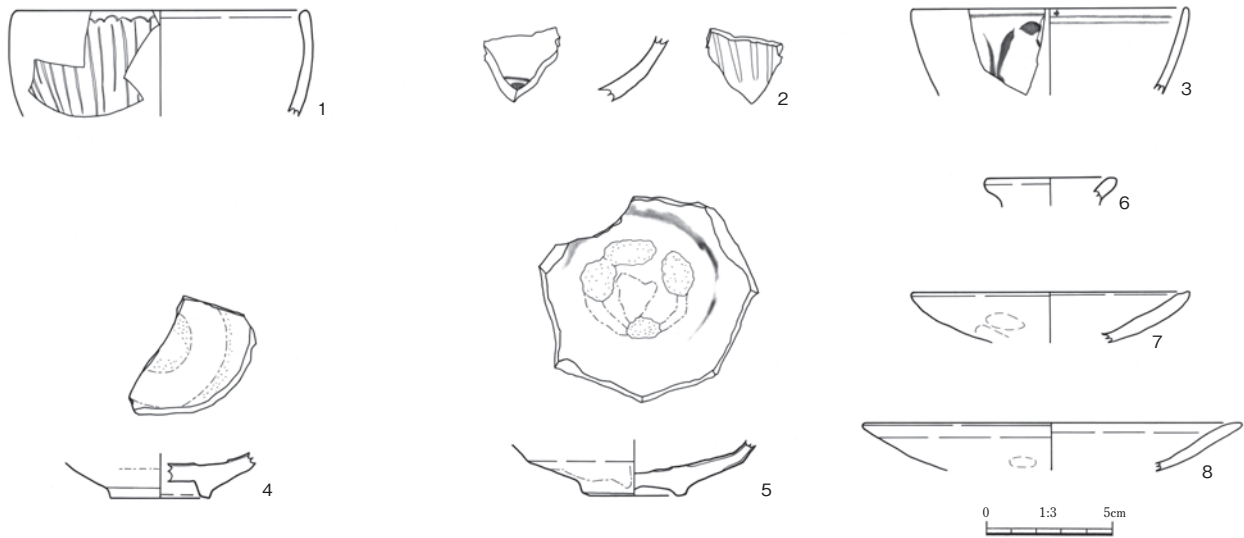
第9図 土層 I



第10図 土層 I 出土遺物

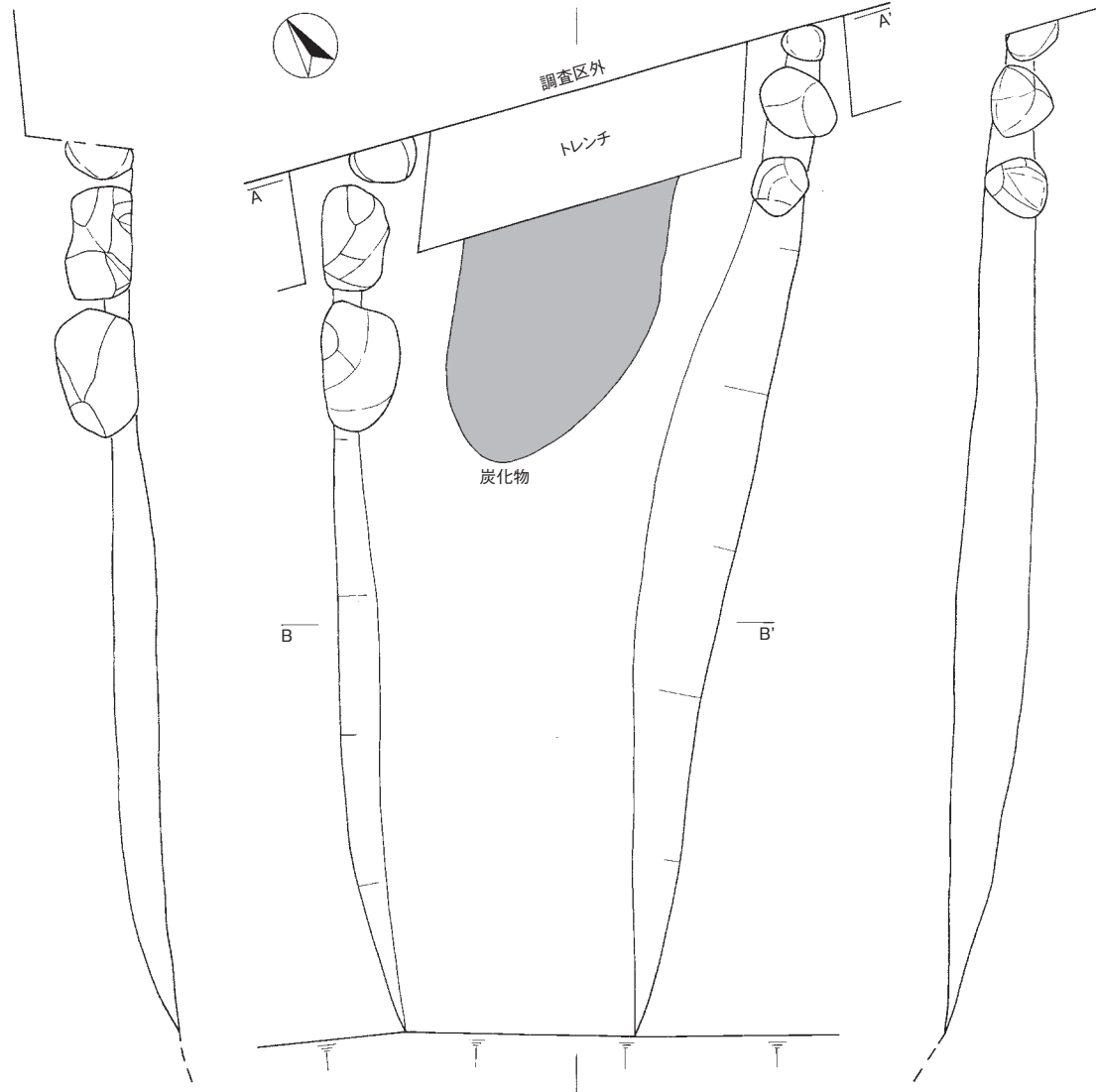


第11図 土塁II



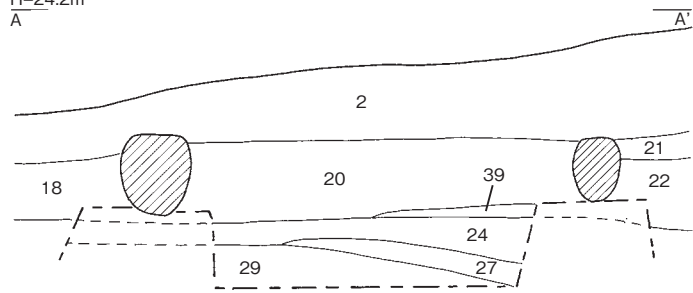
第12図 土塁II出土遺物

H=24.0m



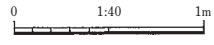
H=24.0m

H=24.2m
A



- 2 農道造成土、路盤土
- 20 淡褐色土(通路埋土、小～中礫混じり)
- 39 炭化物層
- 18 淡褐色砂質土(土壘I、小～中礫混じり)
- 21 淡褐色土(小礫が多量に混じる)
- 22 中～大礫層
- 24 淡褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 27 灰色細粒砂
- 29 灰色微細粒砂

H=23.5m
B



第13図 通路

2. 通路 (第13図)

通路は、土塁Ⅰの南東側に隣接し、北東－南西方向にのびる。北東側は調査区外へのび、南西側は水田の段切りによって削平されているが、長さ5.4m、幅1.3～2.1m、深さは最大で0.4mを測る。北東側には両壁とも土塁の腰石としてそれぞれ3石が1段据えられているが、それよりも南西側には腰石は認められない。腰石は、既往の調査と同様に内側に面を揃えて据えられている。床面は北東から南西へ緩やかに下降傾斜し、北東端と南西端との比高差は0.2mである。北東端の床面には長さ1.5m、幅1.1mの範囲に炭化物が広がる。埋土は小～中礫が混じる淡褐色土の単層で一気に埋められた状況を呈する。

本遺構からは備前焼の細片が1点出土したのみで、出土遺物からは本遺構の帰属時期を特定しがたいが、土塁Ⅰとの関係から16世紀代と考えられる。

3. 自然流路 (第14・15図)

自然流路は、調査区の北西側、土塁Ⅰの下層で検出した。北東から南西へ「ハ」の字状に開き、北東端の幅は2.2m、深さは最大で0.6mを測る。埋土は小～中礫が多量に混じる褐灰色土の単層で、土石流によって一気に埋没した状況を呈する。

本遺構からは土師質土器が出土した。このうち、5点を図示する。1～5は土師質土器の皿である。1～3はいずれも手づくね成型を行っているもので、1、2は口縁部の下に段を有し、1は口唇をつまみ上げ、2は口唇を外傾させている。3は口縁部が内湾し、内外面とも煤が付着する。4、5は底部外面に静止糸切りが施されたものである。4は口縁部の立ち上がりが短いもので、底部外面を静止糸切りした後、その周縁部をヘラケズリしている。また、口縁部には油煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から16世紀代と考えられる。

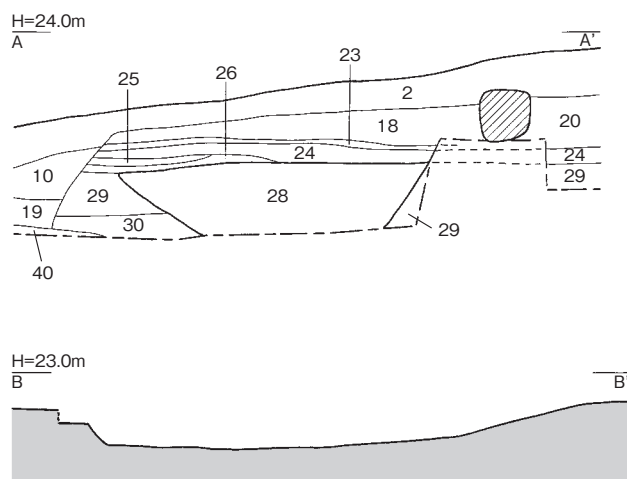
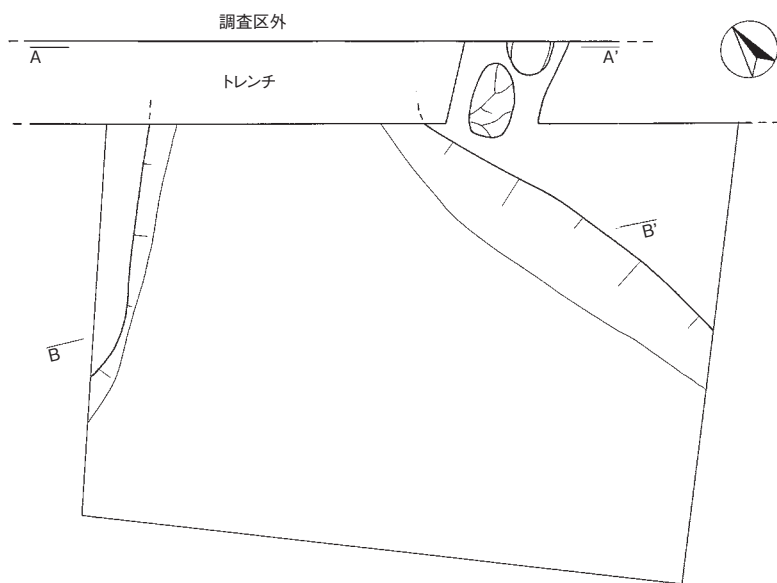
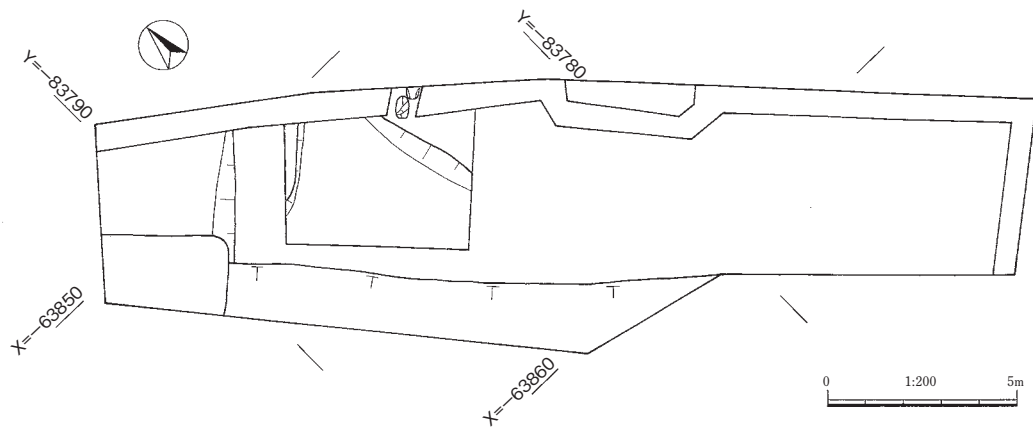
第4節 遺構外出土遺物

1. 平場の造成土(Ⅲ層)出土遺物 (第16図)

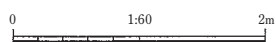
平場の造成土(Ⅲ層)からは陶磁器、土師質土器が出土した。このうち5点を図示する。1は土師器甕の口縁部で、くの字に屈曲し、さらに端部が外反する。2、3は青花皿である。2は小野分類C群の染付皿で、底部は碁笥底となっている。3は小野分類E群の染付皿で、高台には砂が付着する。4は備前焼の播鉢である。5は土師質土器の鉢で、口縁端部が平坦となっている。

2. その他の遺構外出土遺物 (第17・18図)

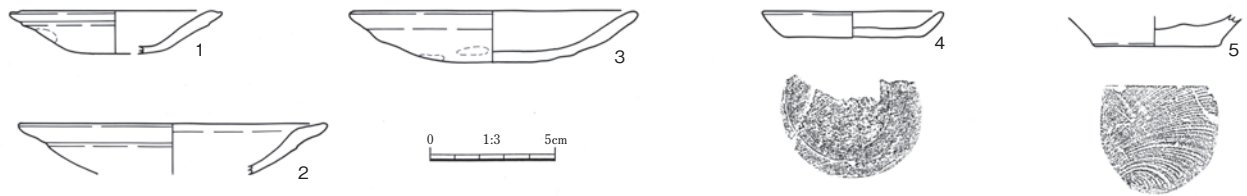
1は縄文時代後期の鉢で、外面には6条の沈線が巡り、擬縄文が施されている。また、上から1、3、5条目の沈線内には刺突文が施されている。2は青磁である。上田分類B4類の碗で、外面には線描きにより剣頭が省略された蓮弁文が施文されている。3は白磁である。森田分類E群の皿で、口縁端部が外反する。4、5は伊万里焼の碗、6は瀬戸焼の碗、7は陶胎染付の碗である。8～11は陶器である。8は唐津焼の三島手の大皿で、内面には刷毛目装飾が施されている。9、10は壺で、9は口縁部、10は肩部で、工具により山形の刻みが施されている。11は備前焼の甕の口縁部で、直立気味



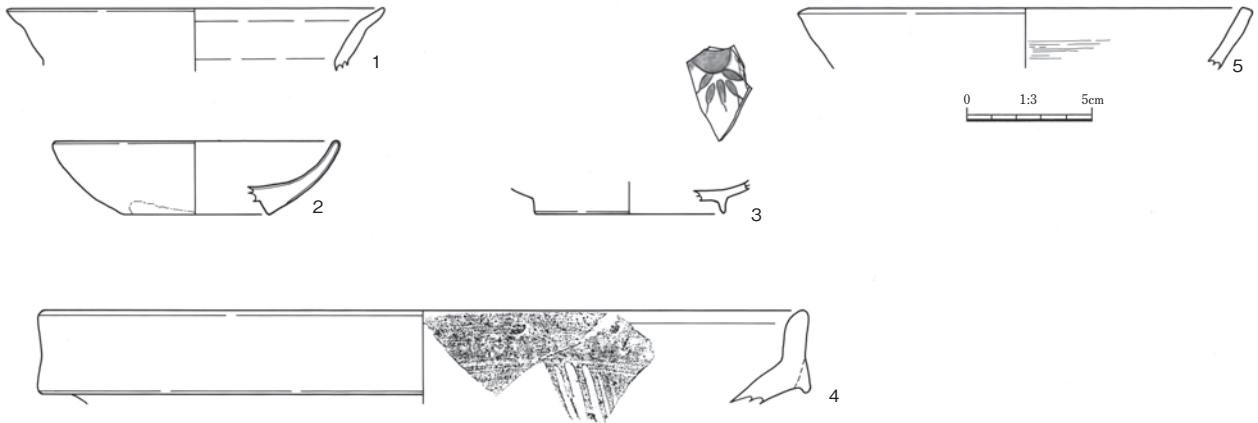
- 2 農道造成土、路盤土
- 10 淡灰褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 18 淡褐色砂質土(土塁I、小～中礫混じり)
- 19 灰褐色土(黄褐色粒、中礫混じり)
- 20 淡褐色土(通路埋土、小～中礫混じり)
- 23 灰色細粒砂
- 24 淡褐色土(黄褐色粒、小礫混じり)
- 25 淡黄灰色微細粒砂
- 26 灰色微細粒砂
- 28 褐灰色土(自然流路埋土、小～中礫が多量に混じる)
- 29 灰色微細粒砂
- 30 灰褐色土
- 40 淡黄褐色土(地山、小～中礫混じり)



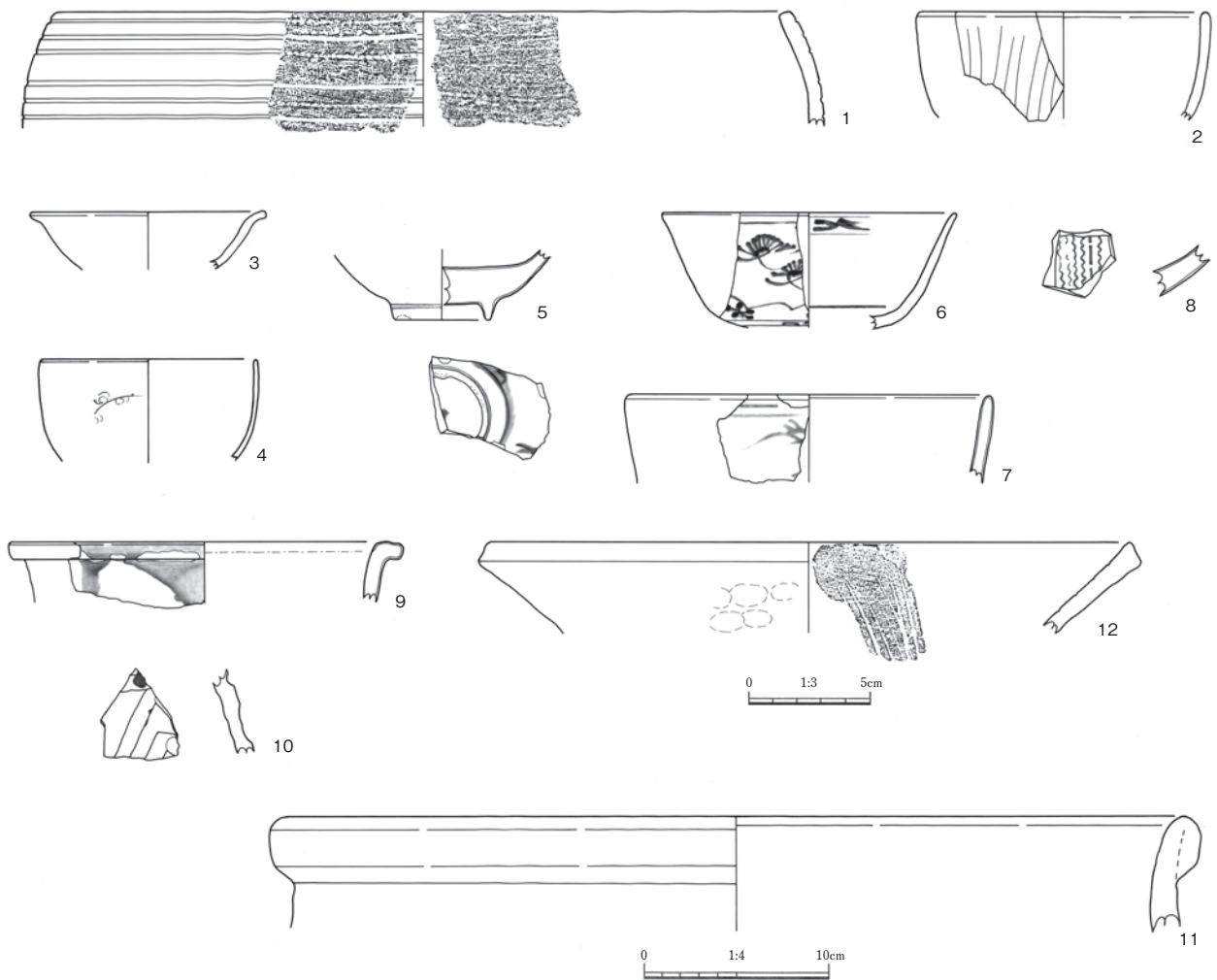
第14図 自然流路



第15図 自然流路出土遺物

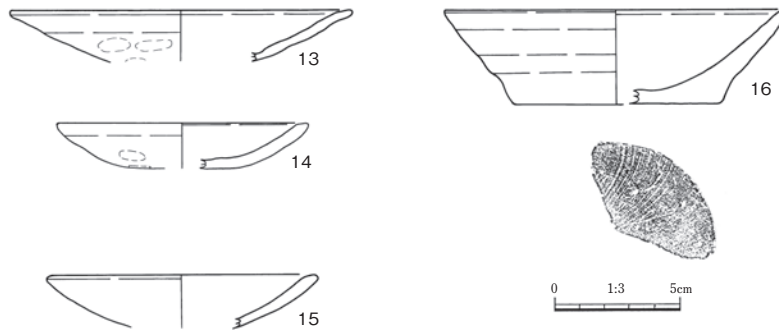


第16図 平場の造成土（Ⅲ層）出土遺物



第17図 その他の遺構外出土遺物（1）

に立ち上がる。12～16は土師質土器で、12は搗鉢、13～15は皿、16は坏身である。13～15はいずれも手づくね成型を行っているもので、13は口縁部が外傾し、14、15は口縁部が内湾する。16は口縁部が外傾し、底部外面には静止糸切りが施されている。



第18図 その他の遺構外出土遺物（2）

第4章 総括

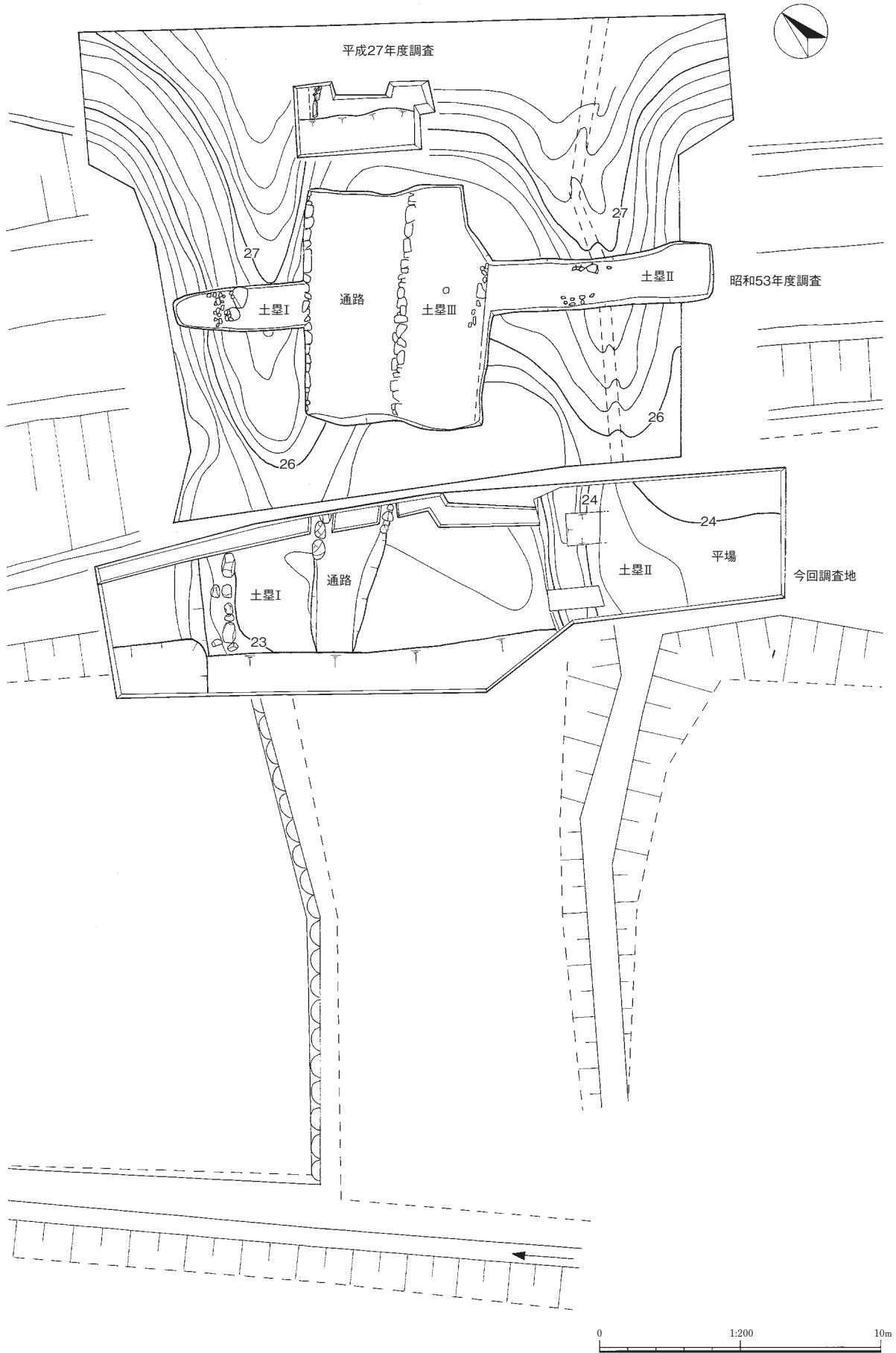
今回の調査では、土塁2基と通路を検出した。既往の調査と合わせると土塁Ⅰと通路は長さ約20mを確認したこととなる。

本調査地の北東側の隣接地で昭和53年度に実施された発掘調査では、両側を土塁（土塁Ⅰ・Ⅲ）によって防御された幅3.0～3.3mの通路が確認されており、また、その北東側の隣接地で平成27年度に実施された試掘調査では、土塁Ⅰと通路の一部が確認されている。両調査地の通路は直線的に続き、床面は緩やかに傾斜し、本調査地の土塁Ⅰと通路につながっているが、昭和53年度調査で検出された通路の南西端の床面と本調査地の通路の北東端の床面は0.5mの比高差がある。また、既往の調査の通路の幅が3.0～3.3mであるのに対して、今回の調査で検出した通路の幅は1.3～2.1mと狭く、南西へいくにしたがって幅を減じていることや、床面がタタキ状となっていないなど、構築が雑となっていることから、昭和53年度調査地と本調査地との間を境に城の内外が区別された可能性がある。

昭和53年度調査では、当初、土塁Ⅰと土塁Ⅲにより防御された通路が構築され、その後、土塁Ⅲを削平し、通路を埋め立てて、土塁Ⅱを構築して通路を拡張したことが明かとなっている。本調査地でも通路が一気に埋められた状況を呈しており、昭和53年度調査と同様に通路を拡張したと考えられる。通路を拡張した時期は、土塁Ⅱの帰属時期から16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

土塁Ⅱよりも南東側は、東から西へと順次埋め立てて造成しており、出土遺物から16世紀代に造成を行ったことが明らかとなった。16世紀代に平場が存在したと考えられるが、平場からは中世の遺物の出土はごく僅かであり、遺構も認められないことから、居住域としては機能していなかったと考えられる。

土塁Ⅰと土塁Ⅱは、南西側の水田の畦畔とつながり、さらに南西へのびている。「本池」や「舟着石」の伝承から考えて城内への水運による物資搬入路として用いられたことが想定されるが、どこまでのびるかは今後の調査に期待したい。



第19図 土壘 I・II、通路位置関係図

第2表 土壘Ⅰ出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	器 高					
1	10	土師質土器 皿	※11.6	—	△1.7	外面：回転ナデ後ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良	灰白色	
2	10	土師質土器 皿	※13.8	※7.0	1.7	外面：口縁部～体部回転ナデ後ナデ、指押さえ、 底部ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	密	良	灰白色	

第3表 土壘Ⅱ出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	器 高					
1	12	青磁 碗	※11.4	—	△4.2	外面：線描き蓮弁文	密	良好	オリーブ灰色	貫入あり 上田B4類
2	12	青花 兜鉢	—	—	△2.6	外面：菊花状の刻文	密	良	白色	貫入あり 型作り
3	12	磁器 碗	※10.8	—	△3.4		密	良好	灰白色	伊万里焼
4	12	磁器 皿	—	4.0	△1.8	外面：削り出し高台、底部露胎 内面：蛇の目釉剥ぎ	密	良好	灰白色	伊万里焼
5	12	陶器 皿	—	4.0	△2.2	外面：削り出し高台、底部露胎 内面：砂目	密	良好	灰色	唐津焼 貫入あり
6	12	陶器 徳利	※5.0	—	△1.1		密	良好	褐灰色	備前焼 外面灰かぶり
7	12	土師質土器 皿	※10.8	—	△2.0	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ、 指押さえ 内面：回転ナデ	密	良好	灰褐色	
8	12	土師質土器 皿	※14.8	—	△1.9	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ、 指押さえ 内面：口縁部回転ナデ、体部ナデ	密	良好	灰白色	

第4表 自然流路出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	器 高					
1	15	土師質土器 皿	※8.4	—	△1.7	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ、指押さえ 内面：回転ナデ	密	良	橙褐色	
2	15	土師質土器 皿	※12.0	—	△2.0	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰白色	
3	15	土師質土器 皿	11.2	—	2.0	外面：口縁部回転ナデ、体部ナデ、指押さえ 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	密	良	橙褐色	内外面 煤付着
4	15	土師質土器 皿	※7.0	5.4	1.0	外面：口縁部回転ナデ、底部静止糸切り後周縁部 ヘラケズリ 内面：口縁部回転ナデ、底部ナデ	密	良	橙褐色	口縁部 煤付着
5	15	土師質土器 皿	—	※5.0	△1.2	外面：体部ナデ、底部静止糸切り 内面：ナデ	密	良	灰白色	

第5表 平場の造成土(Ⅲ層) 出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	種別 器種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
			口 径	底 径	器 高					
1	16	土師器 甕	※14.8	—	△2.8	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良	褐色	
2	16	青花 皿	※11.0	※5.8	2.9	外面：口縁部～体部施釉、高台露胎 内面：施釉	密	良好	灰白色	貫入あり 小野C群
3	16	青花 皿	—	※7.4	△1.3	外面：施釉、高台畳付砂付着 内面：施釉	密	良	白色	小野E群
4	16	陶器 播鉢	※30.0	—	△3.7	内面：播目	密	良	赤茶色	備前焼
5	16	土師質土器 鉢	※17.2	—	△2.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、刷毛目	密	良	灰褐色	

第6表 その他の遺構外出土遺物観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土地 層 位	種別 器種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	器 高					
1	17	Bグリッド 23層	縄文土器 鉢	※29.8	—	△4.7	外面：擬縄文、6条の沈線、沈線内に刺突文 内面：捺痕	密	良	黒茶色	
2	17	Cグリッド 3層	青磁 碗	※11.6	—	△4.4		密	良	濃緑色	貫入あり 上田B4類
3	17	Bグリッド 2層	白磁 皿	※9.4	—	△2.3		密	良	白色	森田E群
4	17	Cグリッド 3層	磁器 碗	※8.8	—	△4.2		密	良	白色	伊万里焼
5	17	Aグリッド 7層	磁器 碗	—	※3.9	△2.9	外面：高台畳付砂付着	密	良好	灰白色	伊万里焼 内外面貫入あり
6	17	Cグリッド 3層	磁器 碗	※11.8	—	△4.7		密	良	白色	瀬戸焼
7	17	Bグリッド 21層	陶胎染付 碗	※14.6	—	△3.6		密	良	明緑灰色	貫入あり
8	17	Cグリッド 3層	陶器 皿	—	—	△1.0	内面：刷毛目装飾	密	良好	赤茶色	唐津焼
9	17	Bグリッド 21層	陶器 壺	※15.8	—	△2.4	外面：緑色の軸垂れ	密	良	白色	
10	17	Bグリッド 23層	陶器 壺	—	—	△3.5	外面：工具による刻み	密	良	灰白色	
11	17	Aグリッド 7層	陶器 甕	※49.0	—	△6.7		密	良好	灰茶色	備前焼
12	17	Bグリッド 2層	土師質土器 播鉢	※26.0	—	△3.7	外面：ナデ、指押さえ 内面：ハケメ、播目	密	良好	橙褐色	
13	18	Aグリッド 7層	土師質土器 皿	※13.4	—	△2.0	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良	灰白色	
14	18	Bグリッド 2層	土師質土器 皿	※9.9	※4.6	1.8	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良好	灰褐色	
15	18	Bグリッド 2層	土師質土器 皿	※10.4	—	△2.1	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	灰白色	内面煤付着
16	18	Bグリッド サブトレ	土師質土器 坏身	※13.4	※8.1	3.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：糸切り	密	良好	灰褐色	

※ 層位のアラビア数字の番号は、第7図の北東壁の土層図の番号に対応する。

写真図版



調査前（南から）



調査前（南西から）

図版 2



全景（北西から）



調査区南東側平場検出状況（南東から）



調査区北西側北東壁土層



調査区中央北東壁土層

図版 4



調査区南東側北東壁土層



調査区南東側南東壁土層



土罫 I と通路（南西から）



土罫 I（南西から）



土壘 I (北東から)



土壘 I 石列及び犬走り (北東から)



土塁Ⅱ（北東から）



土塁Ⅱ（南西から）

図版 8



通路（南西から）



通路（北東から）



通路北西側腰石（南東から）



通路南東側腰石（北西から）

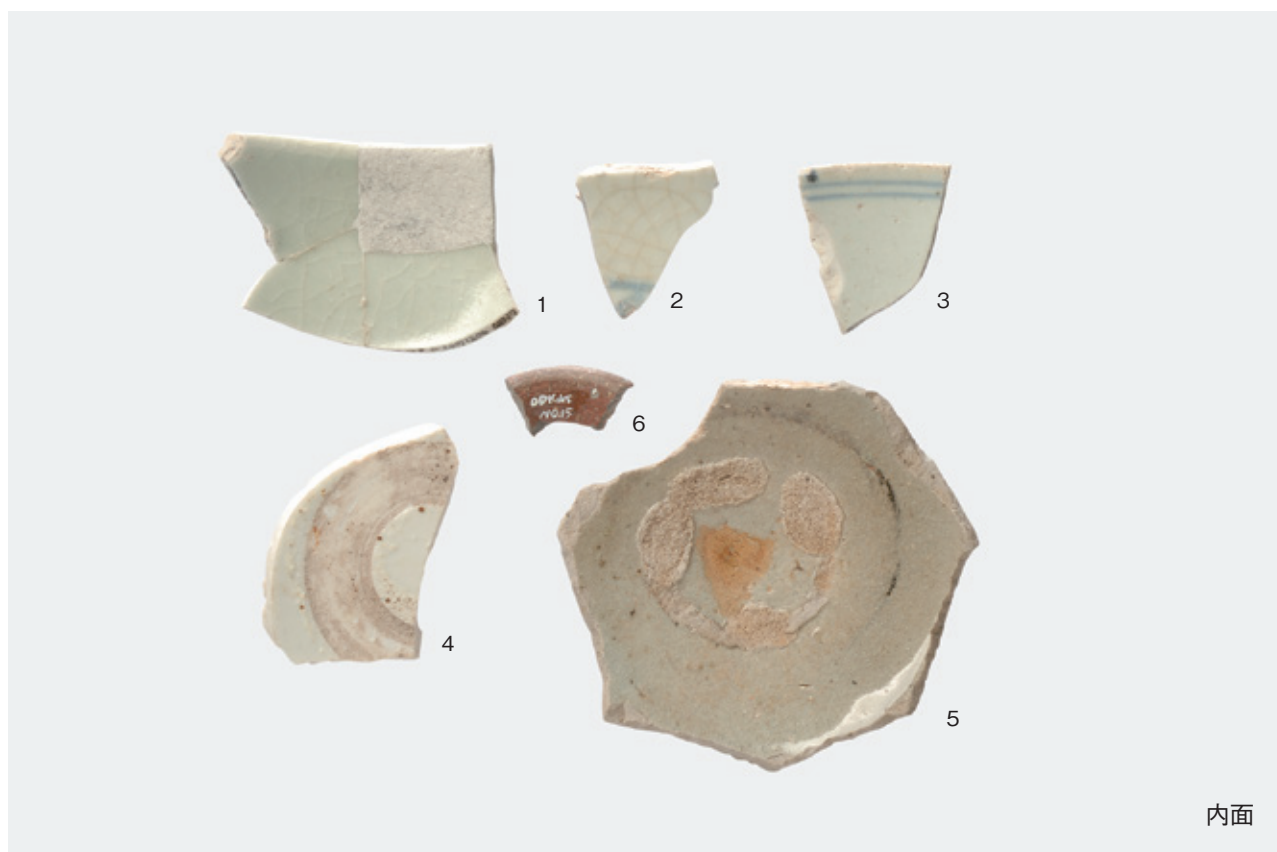
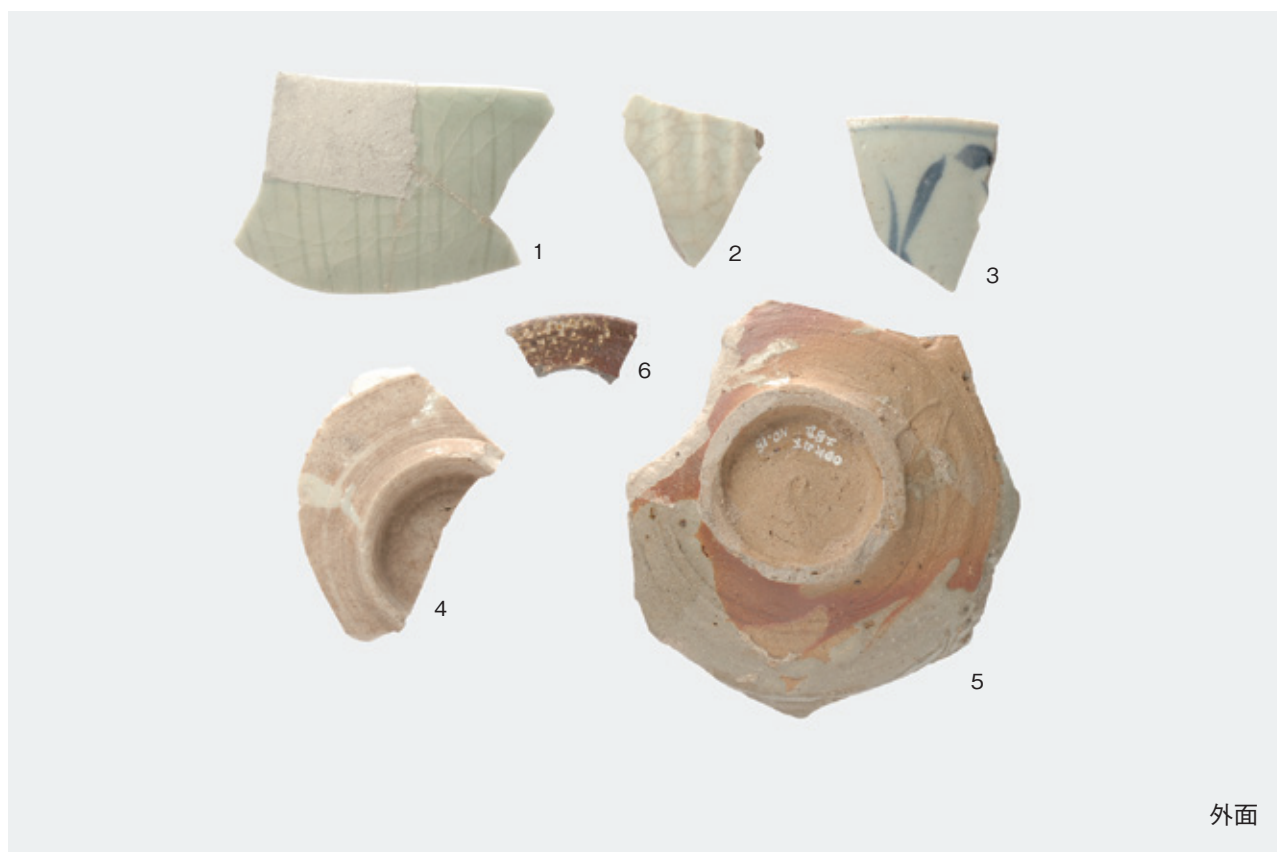
図版 10



自然流路（南西から）

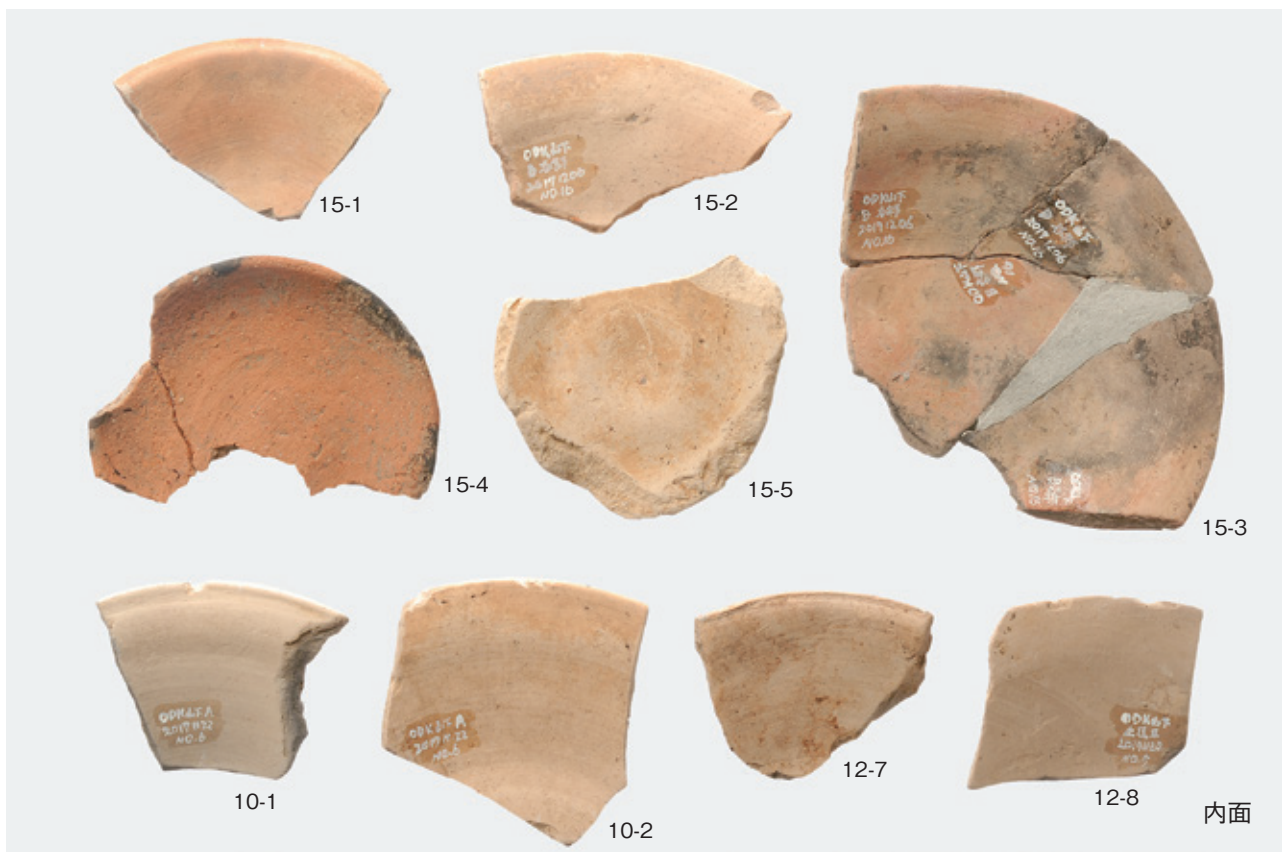


自然流路土層（南西から）

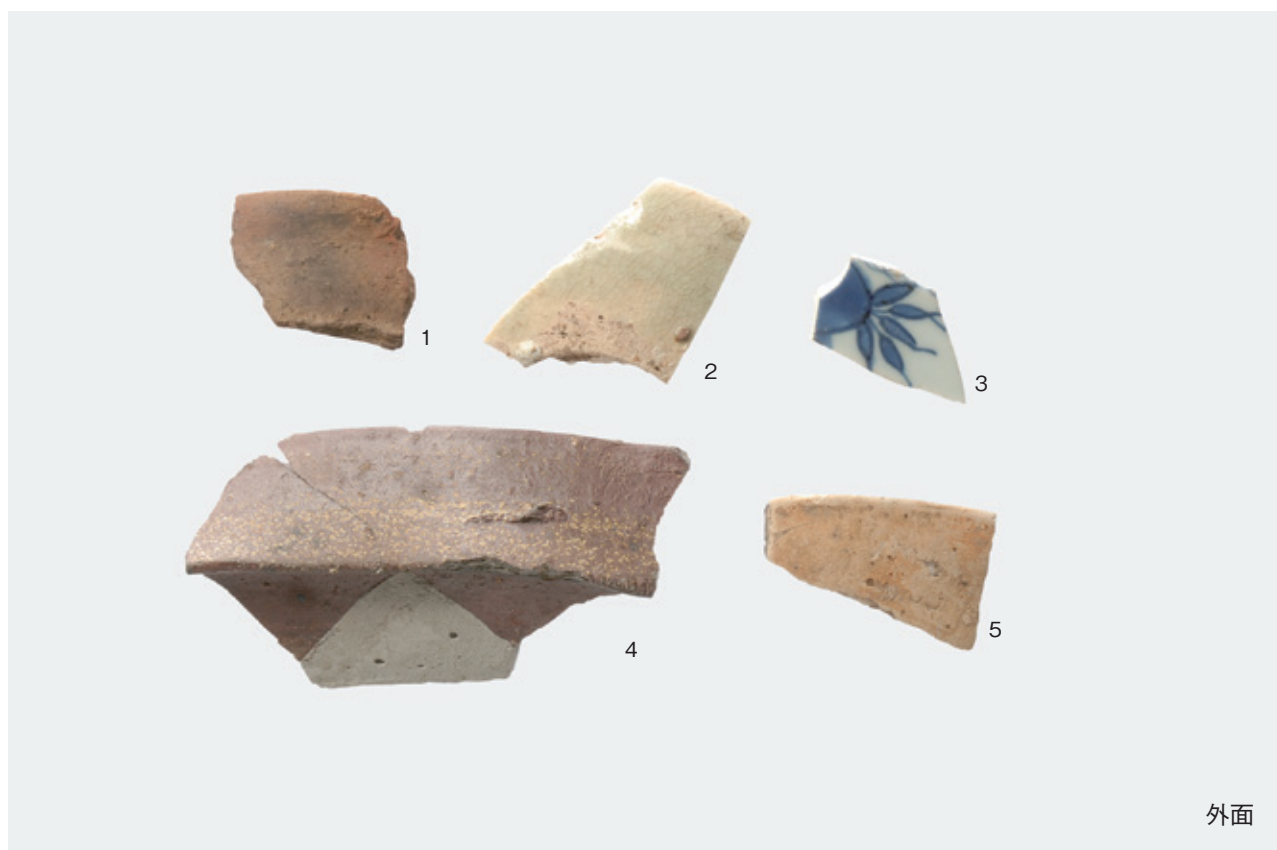


土壘Ⅱ出土遺物

図版 12

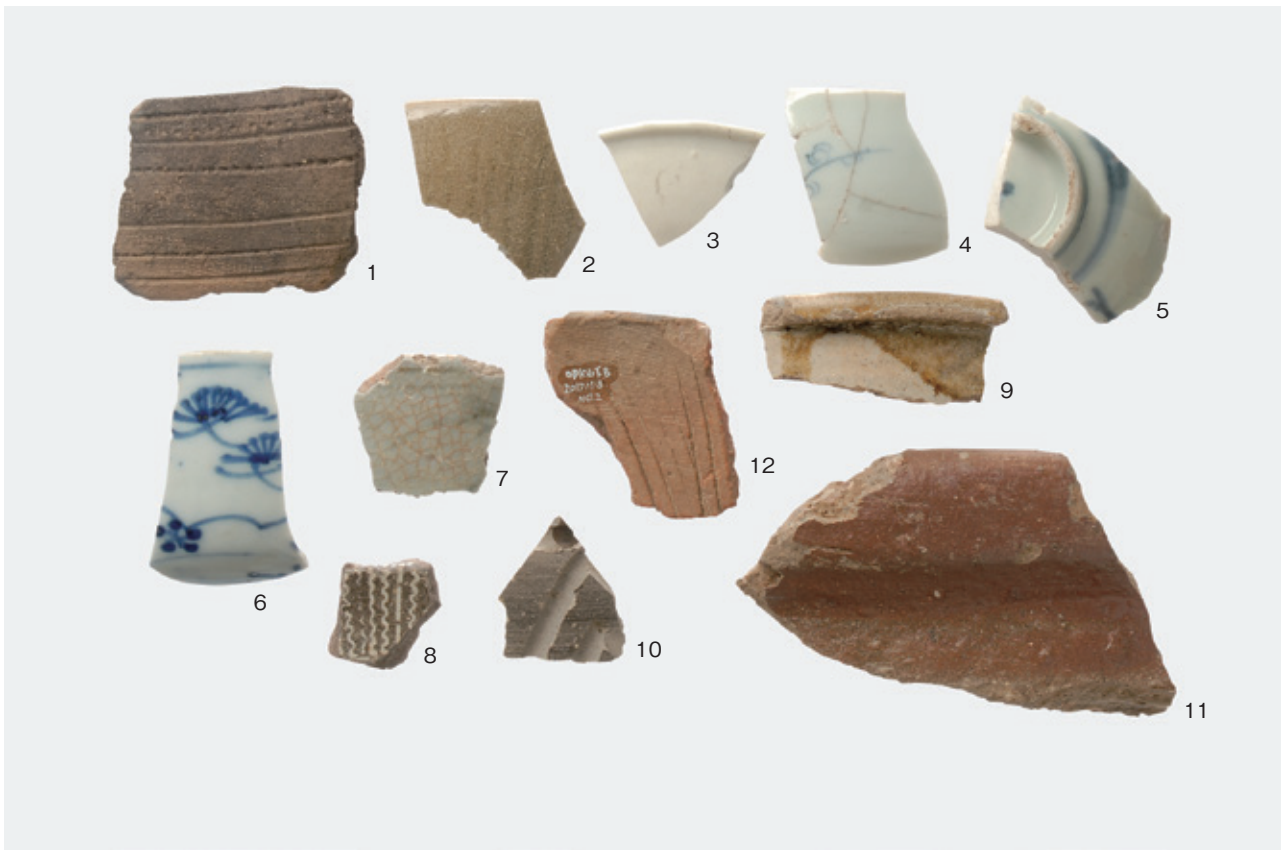


土壘 I・II、自然流路出土遺物



平場の造成土（Ⅲ層）出土遺物

図版 14



その他の遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おだかじょうあとさん -さんげちくのちょうさ-							
書名	尾高城跡Ⅲ -山下地区の調査-							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	15							
編著者名	高橋浩樹							
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2019年3月27日 平成31年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
尾高城跡	鳥取県米子市 尾高	31202	米子市 68	35度 25分 15秒	133度 24分 39秒	2017年11月13日) 2017年12月14日	360㎡	歩道設置 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
尾高城跡	城館	中世		土塁、通路、自然流路		縄文土器、陶磁器、青磁、白磁 土師質土器		
要 約								
<p>尾高城跡は、米子平野の東部に位置し、大山山麓からなだらかに広がる台地の縁辺部にあり、山下地区はその台地の裾部に位置する。</p> <p>今回の調査では、土塁2基と通路を検出した。本調査地の北東側に隣接する既往の調査地でも、両側を土塁によって防御された通路が検出されており、既往の調査と合わせると土塁Ⅰと通路は約20mを確認したことになる。</p> <p>また、昭和53年度調査では、当初、土塁Ⅰと土塁Ⅲにより防御された通路が構築され、その後、土塁Ⅲを削平し、通路を埋め立てて、土塁Ⅱを構築して通路を拡張したことが明かとなっている。本調査地でも通路が一気に埋められた状況を呈しており、昭和53年度調査と同様に通路を拡張したと考えられる。通路を拡張した時期は、土塁Ⅱの帰属時期から16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。</p> <p>土塁Ⅱよりも南東側は、16世紀代に平場が造成されているが、平場からは中世の遺物の出土はごく僅かであり、遺構も認められないことから、居住域としては機能していなかったと考えられる。</p>								

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書 15

鳥取県米子市

尾高城跡Ⅲ
—山下地区の調査—

2019年3月

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団
〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地
TEL 0859-26-0455
印刷 有限会社 米子プリント社